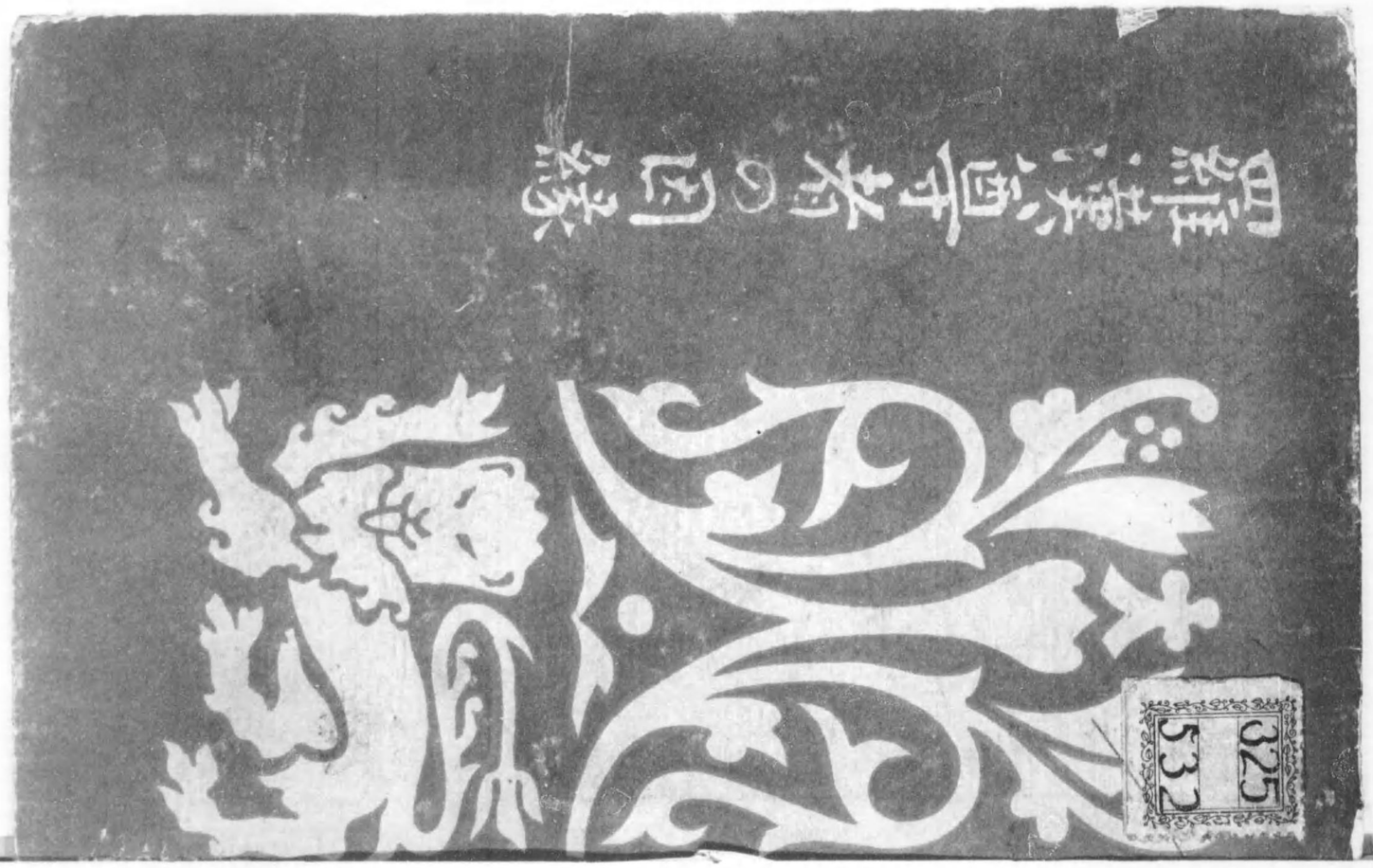
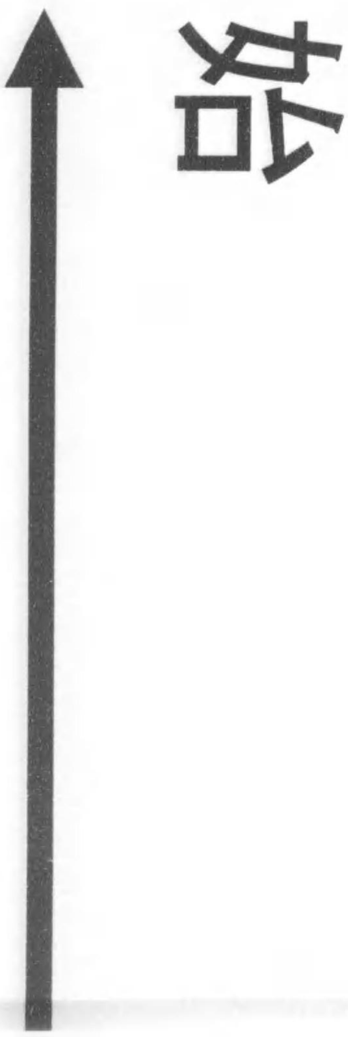
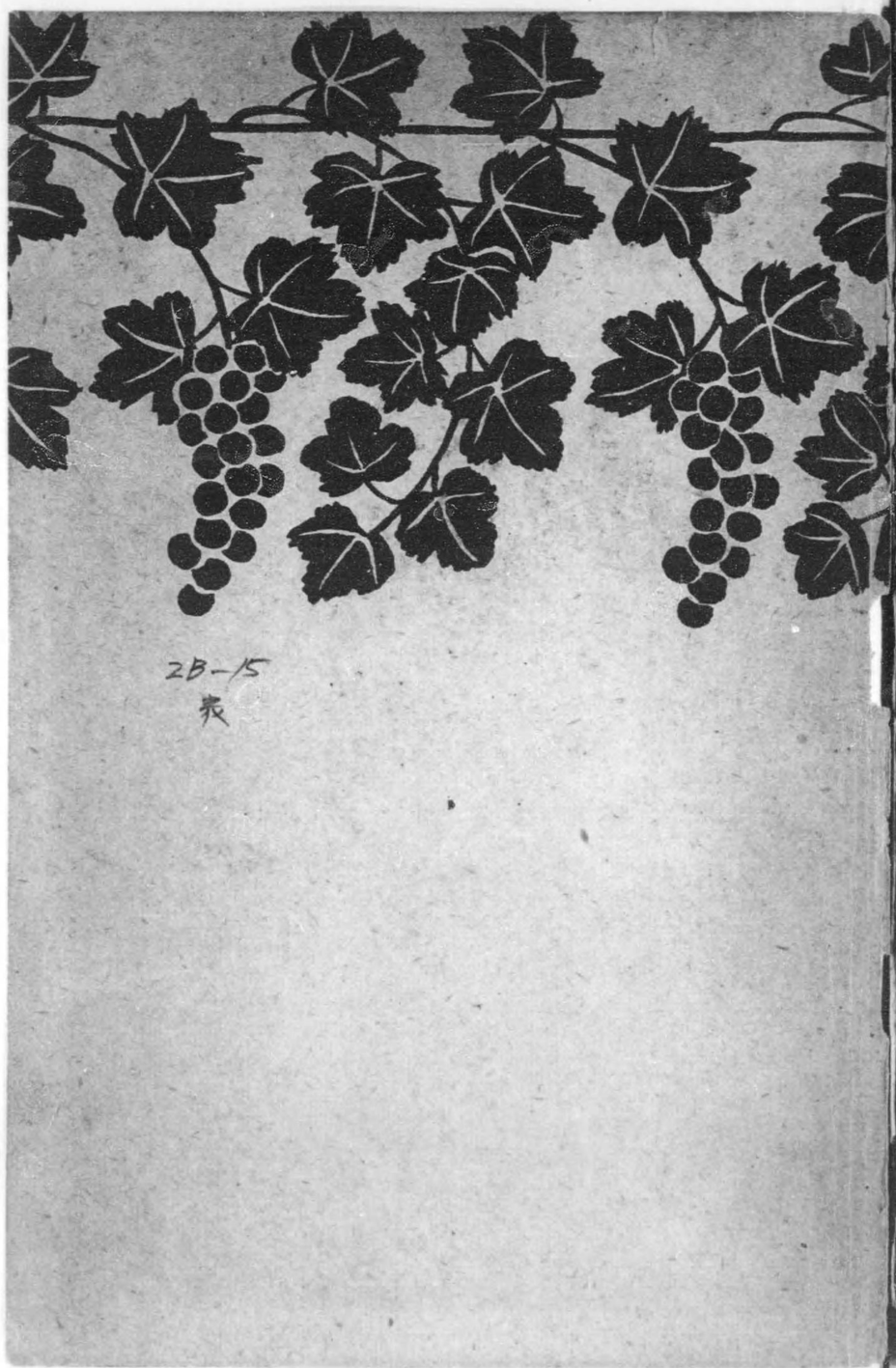
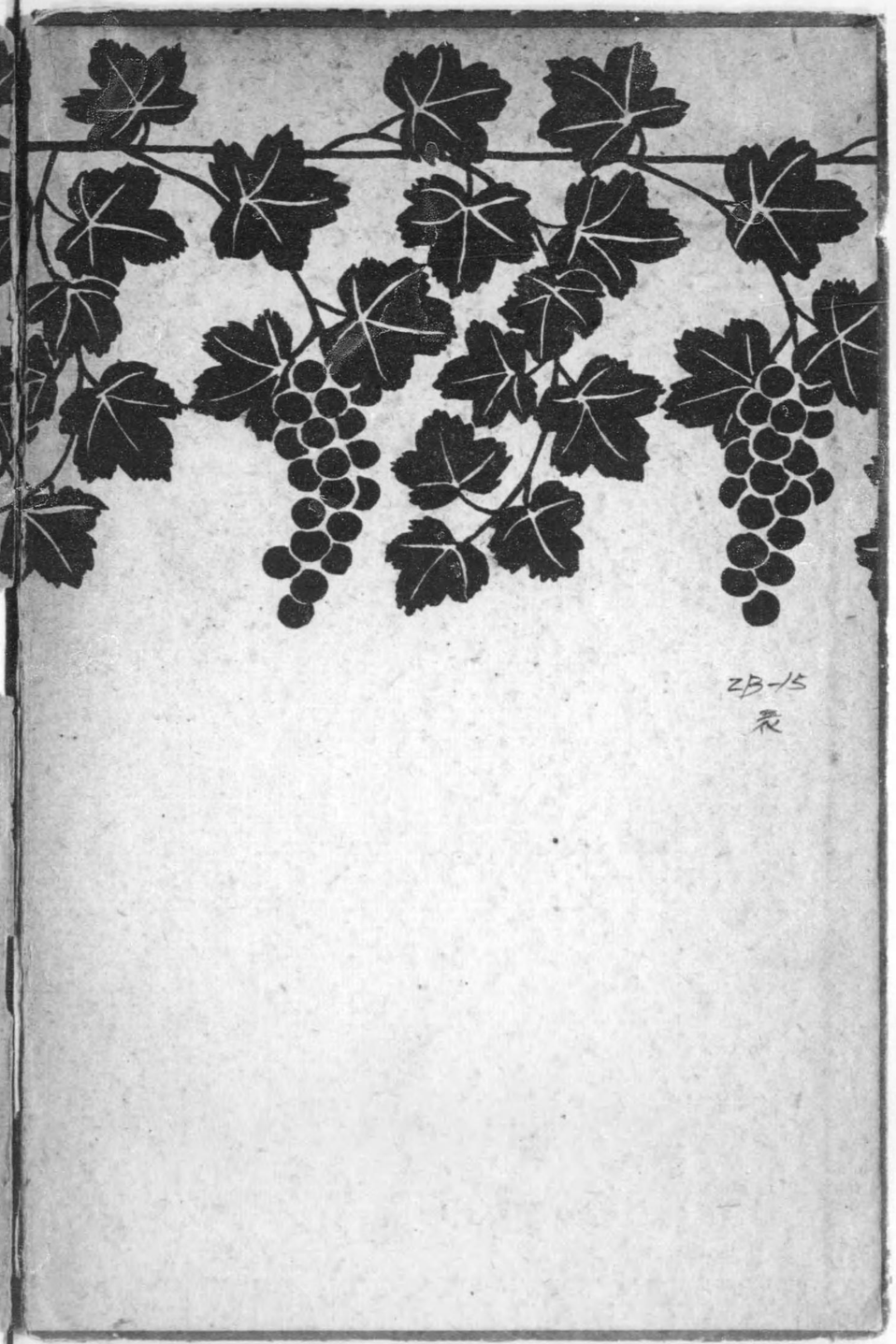

日蓮聖人御本尊
325
532


部



2B-15
表



2B-15
表

ト工ZB-15
325-532

西洋諸国との因縁

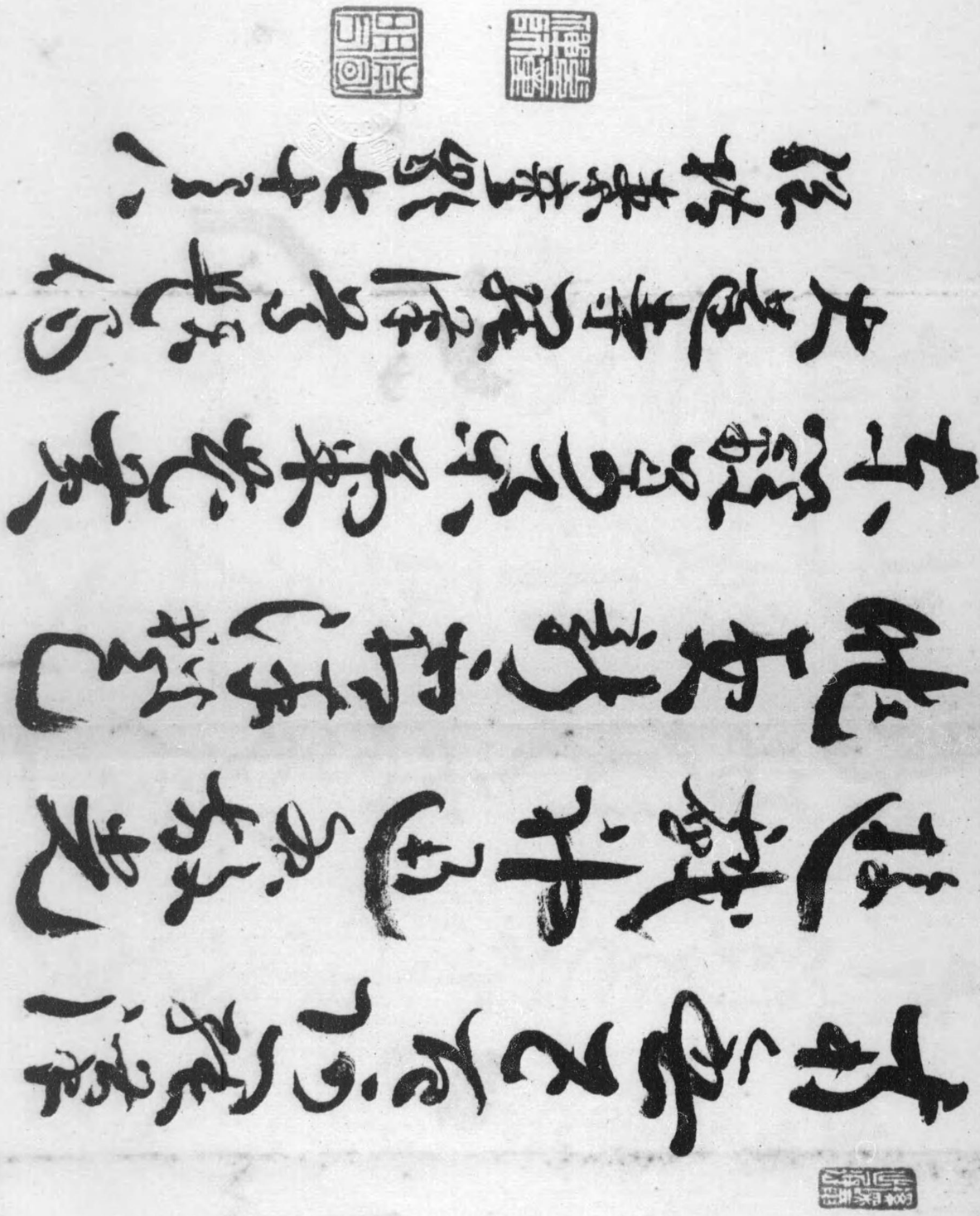
大正
8.3.19
内交

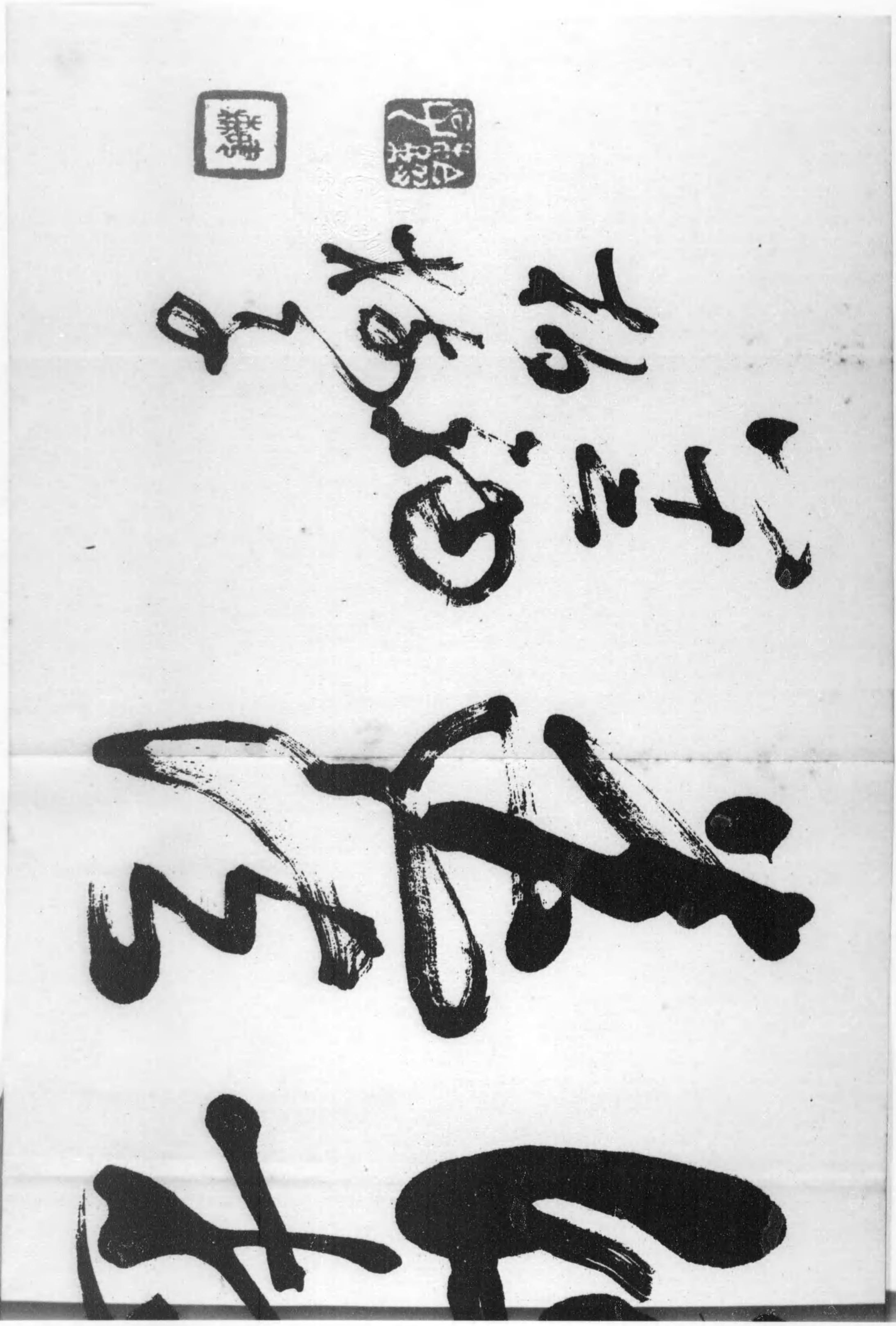
伐那婆斯尊者　傳禪月大師筆

六塵既空　出入息滅　松摧石隕　路迷草合

逐獸於原　得箭忘弓　偶然汲水　忽焉相逢

東坡居士讚





序

承陽大師は羅漢尊者を稱して、學佛者の極果なり、第四果と名く、佛阿羅漢なりと仰せられたり。故に漫りに大小乘の繩墨を守株して、之を批判し奉るべきに非ず。釋尊、入涅槃の時、懇ろに十六大阿羅漢に囑するに、遺法の護持を以てし玉へり。聖者に非ずんば、曷んぞ是の如くなることを得んや。外に聲聞の形を現じ、内に菩薩を盡して正法紹隆を任とし玉ふ。洵に廣大なる

恩德と謂ふべし。今我等、忝く佛祖の兒孫として佛功德に潤ほひ、佛明に照さる、是れ偏へに尊者の鴻德に依るものとす。是を以て我が曹洞宗の如きは、毎朝必ず應供諷經を修して謝恩の誠を伸べ、且つ羅漢供養を以て五大講式の一と爲し、森嚴の儀を修して勸請禮讃し奉るを常とす。然るに世間往々、尊者の盛德殊勳を知悉せざるあり。偶ま其の儀容を好むことあるも、單に之を他の林仙野賢と等視する者亦少なしとせず、是れ獨り尊者に對する敬重の念を缺くのみにあらず、自己の信念修養に於ても得る所なきが如し、甚だ以て遺憾なりとす。仍て玆に尊者の因緣を略述して、其の神通偉德を宣揚し、聊か以て報恩の一端に供せんとす。大方の君子、衲等微衷の存する所を諒し、之に依て尊者殊勝の行持に倣ひ玉はば、庶幾くは靈山の一會、儼然未散なるものあらん。

大正八年早春　最乘現住新井石禪

寄禪月大師　唐　張相公格

龍華咫尺斷來音。　日夕空馳詠德心。
禪月字清師號別。　壽春詩古帝恩深。
畫成羅漢驚三界。　書似張顛值萬金。
莫倚名高忘古舊。　晚晴閒步一相尋。

凡例

一本書は、大蓮寺住職島谷正風師が、羅漢堂修理發願のため特に隨喜して著述したるものにして、一般の營利的出版とは、初めよりその趣旨を異にせり。之れがために新井老師、内外殊の外多忙なるにも拘らず、その執筆を惜まれざりし所以なり。但その編輯に至つては、一切之れを予に委ねられたり。題號の分類、體裁の可否、その瑕玼の點は總て予の負ふ所なり。

一本書の成るに及んで、總持寺貫首石川素童禪師竝に前黄檗宗管長高津柏樹老師、共に題字を賜ふ、誠に是れ大願發起の功德に隨喜

せられたるものにして、發願者と共に編輯者の深く光榮とし、感謝措く能はざる所なり。

一友人戸部隆古君は、新進の畫家にして夙に美術史の造詣あり、本書のため特に「我國に於ける羅漢像」一篇を寄せらたり。且つ卷頭の畫像も、君の好意に依つて之れを得たり。この畫像は高橋男爵家の襲藏にして、禪月大師の筆として、我國に傳來せられたるものゝ中に於て最も逸品たり。讀者、若し能く君の研究と共に本書を併せ觀ば、蓋し羅漢尊者に對して、發明せらるゝ所更に甚だ多からん。玆に記して君の好意を謝す。

一本書の裝幀は、特に之れを橋本邦助先生に煩はせり。先生が筆硯最も多忙なる際にも拘らず、本書發行の精神を諒とせられ、快よく揮毫せられたるは、編者の最も感謝する所なり。而してその圖案は印度模樣の頽しなりと云ふ。

一羅漢尊者の因緣は、面山禪師の『羅漢應驗傳』最も世に顯はれ、『羅漢圖讃集』亦知らる。本書は成るべくお材料を提供して、共に因緣を隨喜せんとせり、編者の苦辛、最も此にあり。若し各方面に捗りてその因緣を渉獵せば、讃歎渴仰すべき者啻に千百のみにあらず、更に新應驗傳を編述するも亦足らず、到底、本書の如き小冊子の能く盡すべき處にあらず、窃に意に滿たざる點猶多し、讀者、幸ひに之れを諒せよ。

一本書の編輯に際し、材料の蒐集に就いて、千葉秀胤、飯田實傳、倉光活文、中島得聞諸師の示教を蒙れり、玆に謹んで謝意を表す。

一本書の編輯を終へて、羅漢尊者化益の最も偉大なることを知悉すると共に、世間猶は多くの因緣史料の隱れたるを發見せり、而してその著述の甚だ稀れにして、布教上の好資料を逸せるを怕る。

予はこの機會に於いて、他日、新應驗傳を起稿せんことを期す。有道の諸師、幸ひに示教に吝ならず、推挽以てその發願を成就せしめ給はば、蓋し亦福田利益の一助たるものか。

大正八年二月廿六日、東籬の梅花將に綻びんとする時、鳳來禪房にて

高橋竹迷誌す

羅漢尊者の因緣目次

一　遺法の護持……一

佛陀の本懷…釋尊の涅槃…羅漢尊者に依囑…羅漢講式式文…遺法の護持…求道報恩の精神…流に溯りて源を知る…佛法大家の相續…忠實なる店員…永平寺の羅漢應現…李龍眠の因緣…佛像揮毫の發心…感應道交…常濟大師と羅漢尊者…明治天皇の大精神…日本中興の尊者。

二　名號の譯義……一五

人間の如來…羅漢の譯義…殺賊…不生…應供…因果對譯…恩德…斷德…智德…元政上人と羅漢尊者の智慧…三德と三義と三行…羅漢の階級…外現是聲聞…世間の羅漢…學佛者の極果…承陽大師の羅漢信仰…應供諷經…遺法護持の結果…國家的信仰。

三　無邊の神通……二九

狩野一信の發願…了瑩上人の隨喜…亮迪上人の師志相續…大雲上人の指導…

五百羅漢の新研究…活社會の教訓…一代の丹誠…妻お判の内助…三明…六通…神通妙用…五力…八解…羅漢尊者の境界。

四　得樂の方便……四二

方便の應現…馬琴の羅漢觀…我等と共に在り…羅漢の數別…乾坤山日本寺…法住記と十六羅漢名號…五百羅漢名號…行誠上人の聖幅護持方軌…聖畫を米錢に易へよ…一日の護持は一日の護法なり…羅漢活用の大說法…羅漢信仰の圓滿。

五　住處の名號……五四

羅漢尊者の住處…諸方に遊戯す…一たび請すれは一たび來る…法性の月と衆生の水…敲けば門は開かる…箇箇面前の阿羅漢…耶馬溪の羅漢寺…耶馬溪の勝概…羅漢寺の緣起…異僧建順の發願…昭覺禪師の常在法身…將軍義滿の歸依…書闍崛山の譯義…常在靈鷲山…耶馬溪卽靈鷲山…直心道場の建立…十方普遍の應現。

六　興隆の利益……六四

應現の目的…羅漢寺の沿革…禪海の發心懺悔…新道開鑿の大業…二十餘年の丹誠…孝子の復讎…昨日の敵は今日の友…耶馬溪の活羅漢…正法の興隆…松本藩の廢佛…足立達淳師の護法心…戰爭と羅漢尊者の出現…正法滅沒の時…行誠上人と本所の羅漢寺…諸方遊戯の實際…報恩の行持。

七　福田の利益……八二

兆殿司の五百羅漢…伏見稻荷の祈願…繪具谷の靈驗…信仰と恩愛…衆生の大福田…常凡の衆と同じ給ふ…井戸掘五左衞門…芋代官…種々身處々現…敬禮の精神…承陽大師感應の敎訓…風外禪師の十六羅漢…兒玉果亭翁の感奮…を福田に蒔く。

八　除災の利益……九三

信仰と靈驗…善神の守護…惡魔降服の姿…精進の權化…信心を第一とす…拔苦與樂の誓願…家庭の圓滿…百事吉祥…蘇東坡と十八羅漢…程公と羅漢尊者の救護…誕生日の祝儀…社頭祈世の御製…般若の錦帆…大智慧と大力。

九　無窮の利益……一〇五

月を標すの指…舍利の供養…廣大の佛德…舍利の功德…釋尊と羅漢尊者…松雲和尙の發願…江戸に五百羅漢…托鉢の化導…江州佐兵衞の感喜…札差十

六人の隨喜…信仰の結晶。

十人人の活羅漢……一一六

羅漢尊者の信仰…禪月大師の羅漢感得…自身是れ羅漢…佛乘禪師の羅漢圖…最乘寺の傑作…佛と我が心…卽心是佛…釋迦牟尼の譯義…佛教の目的……の會は是れ靈山會なり…獨吼禪師の跋文…傳家の寶…自己の主人公…菩薩行の實踐…遺法護持の目的…妙義寺の雪舟羅漢…寶物の番人…自己心中の活羅漢…脚下の黃金地。

附錄

我國に於ける羅漢像……戸部隆古

羅漢尊者の因緣目次（終）

羅漢尊者の因緣

新井石禪
高橋竹迷　共著

一　遺法の護持

佛陀の本懷

お釋迦樣がこの世へ御出現遊ばされた御本懷は、申すまでもなく轉迷開悟、拔苦與樂で、迷へる者を悟らしめ、苦しめる者を助けて樂を與へ、勞れたる者を慰めて、息はしめ、悲しめる者を撫りて歡ばしめ、冥きより冥きに落ち、闇より闇に彷徨へる我々一切衆生を助けて、闇黑の世界に光明を與へ、弱き人に力を與へんとの大慈悲心である。佛心とは大慈悲心是れなりで、慈悲の結晶が卽ち佛樣である。この大慈悲心のために、娑婆往來八千返の御苦勞も遊ばされ、難行苦行十二年の御修行も

遊ばされ、更に四十九年の横説竪説、三百餘會の御説法、五千四十餘卷の經文をも御説き下さつたのである。思へば誠に有難い次第で、佛敎八萬四千の法門は、悉く皆如來大悲の結晶である。

然るにお釋迦樣は、御齡八十歳の春、娑婆の化緣既に盡きて、二月十五夜、滿々たる月は天に冴え渡り、流るゝ水も聲を潜め、空飛ぶ雲も足を停むる眞夜中、天地寂然として音無き時、跋提河の涯、沙羅雙樹の間に於て、將に涅槃に入り給はんとした。枕邊に集つた大勢の弟子衆や信者達は、啼涙悲泣と、恰も父を失ふ子の如く、聲張上げて泣き、慨き悲まれたのである。而してモウ暫らく此の世に御留りむつて御化導下さるやうにと訴へられた。お釋迦樣は、弟子等が切なる心を嬉しくも亦愍れに御思召されて『世は皆無常なり、牢强き者は無く、生れたる者は死し、會ふ者は必ず離る。縱令、我れ世に住すること一劫するとも、又遂に離れざるべからず。若し我れ死するとも、今より已後、汝等、我が諸の弟子、展轉して我が法を行ぜば、

釋尊の涅槃

如來の法身は、汝等と共に常に在つて、永劫に滅せざるなり』との意を、諄々と御示し下さつた。これが卽ち『遺敎經』で、お釋迦樣が最後の敎誨である。言々これ血、句々これ涙である。

この尊き御遺敎を聽いて、弟子衆は初めて大安心を得たのである。その時にお釋迦樣は、更に枕邊に慨き悲んで居る御弟子の中、特に十六人の大弟子を呼び寄せられた。これが卽ち十六羅漢尊者である。お釋迦樣は、この羅漢尊者に向つて、遺法護持の大任を御依囑遊ばされたのである。その故は、お釋迦樣が一たび御入滅遊ばさるれば、縱令、如來の法身は常にこの世に在まして滅し給はざるも、肉身の娑婆敎主が失くなるのである。而して之れから五十六億七千萬年經たなければ、第二の娑婆敎主たる彌勒菩薩は、此の世へ御出現遊ばされぬ。故にその彌勒菩薩の御出世まで、涅槃を許さず、遺法を護持するやう、御依囑遊ばされたのである。この御樣子を、『羅漢講式』の「式文」にも

羅漢尊者の因緣

夫れ佛、拘尸那城娑羅林の間に於て、圓寂に歸し給ふ時、賓頭留等の十六羅漢を召んで、摩頂して言く、我が無上正法を以て汝等に付屬す。我が滅後、彌勒已前に涅槃に入らずして、當に我が法を興し、衆生を利益すべし。我れ化緣已に盡きぬ、設ひ世に住すとも益無しと。玆に於て十六の尊者、金口の遺屬を聞いて、啼泣すること小兒の如し。覺えず一鉢を投じて、悶絶、地に斃る。佛、再び慰諭し給ふに蘇るが如くにして起き、淚を歛めて頂受して、佛勅に違せず。

とあります。お釈迦様が我々一切衆生を憐れみ給ふ御慈悲の有難さは申すまでもありませぬが、その御遺囑を受けて『佛勅に違せず』御言葉には背きませぬと、堅く遺法護持の重大なる責任を御誓ひ遊ばされた、羅漢尊者の御決心は、實に尊い次第である。羅漢尊者の御出現は、唯この遺法護持、佛法守護のためのみである。即ち『佛の親付屬を得て、世間に現住し、佛法を紹隆し給ふ』ので、今日、釈尊滅後三千年を經た末法の世に、我々お互が、猶ほ受け難き人身を受け、遇ひ難き佛法に遇ひ奉ることを得るのは、全く羅漢尊者、遺法護持の御德と有難く感謝し、頂禮恭敬せねばならぬことである。羅漢尊者の尊いのは、この御德のためである。古歌にも「火の中を分けても法は聽くべきに、雨かぜ雪はものゝかずかは」とある如く、一句の法門、一言の說法を聽くために、尊い一命を投げ捨てた人もある。お釈迦様が因地、即ち先の世の御修行などは、實に勿體ない御苦勞を遊ばされたのである。それが又、印度から支那、支那から朝鮮、朝鮮から日本と、佛法は次第に東流して、三國傳來したこの間には、番々出世の祖師方が、隨分御難儀遊ばされ、法を求めて遠き印度に赴き、その途中で虎や狼のために、尊き一命を捨てられたお方もある。皆、これ法のために身命を惜まず、只一切衆生のために、この大法を御傳へ下されたのであります。のみならず、支那に於ても「三武一宗の厄」と申しまして、度々佛法破滅の大難に遇ひ、我が國でも、近くは明治維新に廢佛毀釋に遇うて、殆んど佛法を滅却せんとしたのであります。その中に又正信正解の人々が出て佛法を再興し、遂

に今日に及んで居るのでありますが、これ皆、羅漢尊者が因緣に依つて、處々に應現遊ばされて、佛勅を奉じて遺法を御守護下されて居るお蔭であります。故にお互は、信心恭敬して、その廣大なる恩德に報謝せねばなりませぬ。それがために、その信仰の對象として、寺々に羅漢尊者の御像も祀られてあれば、又その供養の大法會も行はれるのであります。

流に溯りて源を知る

昔から『流れに溯つて源を知る』と申しまして、川の流れを段々と溯つて、初めてその源を知るのであります。三千年來傳へられた今日の佛法を譬ふれば、丁度、一つの大きな川であります。今試みにその流れに溯つて段々と源を尋ねて見ますと、お釋迦樣の御說法は申すまでもなく、正にお釋迦樣が御涅槃の夕に、遺法護持の御依囑を羅漢尊者に遊ばされた、尊い御因緣を合點することが出來ます。故に「式文」にも

流れを酌んで源を尋ぬるに、世尊の廣恩に非ずと云ふこと無く。香を躾いで根を討ぬるに、豈に羅漢の芳心にあらざらんや。

とあります。若しお互が、苟も恩を知つて恩に報ひ、德を受けて德を謝す、人らしい心があつたならば、先づ羅漢尊者の御恩德に報謝せねばならぬのであります。羅漢尊者こそ、佛法が闇黑になるべき所を照し給うた日月であります。

佛法大家の相續

之れを一軒の家に喩へても左うである。お父さんが一代丹誠苦勞して漸く作り上げた一身代。さて臨終の時に心に掛るは唯一つ、あゝ後の倅が無事に之れを相續して呉れるか……倅は氣遣ひないとしても、『賣家と唐樣で書く三代目』若しや孫の代にでもなつて『三代目、倉が月見の邪魔になり』と、段々と家が衰微はしなからうか、而して遂には先祖の御位牌の守も出來なくなり、近所隣家親類緣者の果までも迷惑かくるやうなことがあつてはと、心配をすれば實に死ぬにも死ねぬのであります。有難いのは親の慈悲である。重き枕を上げて倅や孫に能く遺言をした揚句、親類緣者から店の番頭衆に向つて、『何卒この家の動かぬやう、先祖の祀の怠らぬやう、何

百年の後までも、お互に世話をし合つて、益々繁昌するやうに頼みます』と、涙ながらに頼むのである。頼まれた人々が、『宜しい、御安心下されませ、身に替へても御引受け致します』と、堅く受合つて呉れたやうなものである。羅漢尊者は、佛法と云ふ大身代の相續と繁昌とを、身に替へて引受けて下さつた忠實なる店員である。

忠實なる店員

その家が、それ等店員の骨折で、何十代、三千年の長い間相續して、この間には度度、家政整理をするやうな目にも遇つたが、幸ひに今日まで無事に先祖の御位牌を御守するのみならず、益々繁昌して、社會的にも國家的にも働いて居るとすれば、その世話した人々の骨折のほども思ひやらるゝのであります。思へば實に尊い次第であります。それでありますから、羅漢尊者は、禪宗、淨土の隔てなく、何れの宗旨でも之れを御祀りするのであります。中にも我が曹洞宗には別して深い御因縁があるのであります。

恭しくその御因縁を尋ねますと、我が高祖承陽大師が御年五十歳の寶治三年の

永平寺の羅漢應現

正月元日、越前の永平寺に於いて羅漢供養の大法會を御修行遊ばされた折、不思議なる哉、瑞華、雨つて、祀つてあつた木像や畫像の十六羅漢尊者が悉く大光明を放たれ、庭前の松の樹にも亦羅漢尊者が現はれた。承陽大師は直ぐ様「十六羅漢應現記」と云ふを御書き遊ばされて、『寔に芽出度いことで、尊者が當山の人法を哀愍、覆護し給ふのである』と仰せられた。この御眞筆と羅漢尊者の御畫像とが、今も猶ほ茨城縣若芝の金龍寺に傳つて、宗門第一の寶物となつてをります。而してその畫像こそ、日本で云ふならば狩野法眼元信とか圓山應擧とか、兆殿司とか雪舟と

李龍眠の因縁

か云ふやうな、支那第一流の畫家たる李龍眠が描いたのであります。この尊い御畫像を、承陽大師が支那から御歸朝の砌、理宗皇帝から御請來遊ばされて、永平寺で御供養なさつたのであります。殊に李龍眠がこの羅漢尊者を描くに至つたに就いても、亦尊い信仰談があるのであります。

當時、李龍眠は既に一代の大家でありました。殊に性來、馬が好きで、馬を描く

羅漢尊者の因緣

ことに妙を得てゐたのであります。或る日のこと、一人のお客が『先生は御宅か』と尋ねて來ました。取次に出た妻さんが『ハイ居ります、今、畫を描いてゐますが』と申しますと、心安い仲ですから、それならばと、遠慮なく直ぐ先生の畫室へ通りました。『御免下さい』と云ひつゝ襖を開けますと、これは又意外！大きな赤馬が臥て居る、喫驚して飛び出し、お妻さんに夫れと告げる、妻さんは不思議に思つて、『左樣なことは無い筈ですが』と、自ら先に立つて最前の室を開けると、李龍眠先生、一心不亂に畫を描いてゐて、馬の影は更にない。之れは不思議と、客人は驚いて、實は斯く〳〵斯樣の次第と語りますと、李龍眠も亦驚いて、『何を隱さう最前は、馬の繪を描かうと、一心に趣向してゐたのである。さても怖るべきは人の一心である、自分が丹誠籠めたその時には、この身このまゝ其の姿になるのである。若し馬を思つて馬になるならば、佛を思へば佛になるの道理、苟も萬物の靈長と生れた自分が、この身このまゝ畜生になるは愧づかしい。好矣、今後は心を替へて佛にならうと

佛像揮毫の發心

感名道交

こゝに一念發起して、斷然、馬畜類に筆を絶つて、それ以來、益々信念を勵んで、羅漢佛像ばかり描くやうになりましたが、その熱烈なる信仰動機を以て筆を採つたのでありますから、一枚の畫、一本の線とても、最も純潔なる信仰的精神の籠つてゐないものはないのであります。即ち李龍眠が羅漢尊者を描く時には、自らの身も心も共に羅漢尊者になり切つて描いたのでありますから、出來上つたその畫像は、そのまゝ活る羅漢尊者であります。宗教的の畫は、實にこの畫家その人の信仰が生命であります。李龍眠がこの信仰と其の人格とを傾け、一代の心血を灑いだ尊いこの十六羅漢尊者の尊像を、我が承陽大師が御請來遊ばされたのであります。描き人が描き人なれば、祀り人も亦祀り人で、承陽大師の御精神と李龍眠の信仰とが、端無くもこゝに感應道交して、彼の不思議の祥瑞を現じたのであります。信仰は理窟ではありませぬ、信仰の發する所、畫像の光明を放つに何の不思議もありませぬ。お互が誠心を傾け、眞の信仰を以て羅漢尊者を供養したならば、如何なる時、如何

なる所でも必ず不思議なる靈驗があるのであります。承陽大師が『當寺の人法は、哀愍。覆護する是の如くなる所以なり。』と御書き遊ばされたのも、亦御尤もなる次第であります。この御靈驗あつたればこそ、大師滅後六百五十年後の今日、我が宗門が益々繁榮しつゝあること、有難く感ぜられるゝのであります。

承陽大師にこの尊い御因緣があるのみならず、更に太祖常濟大師にも亦尊い御因緣があるのであります。即ち常濟大師御年四十五歳の折、能登の永光寺御建立遊ばされた時には、十六羅漢尊者の第八伐闍羅弗多羅尊者が御出現遊ばされて、普請の御世話をなされ、大師のために祥瑞を現ぜられました。これが『常濟大師御和讃』に。

『正和二ねんの丑のとし。富樫家方、歸敬して。數多のたから寄進なし。伽藍をおこす永光寺。建立したまふ朝には。いとも氣高き羅かん尊。應現ありてもろ〳〵の。祥瑞あるこそ目出たけれ』とあるのである。これ亦、遺法護持の御靈驗であります、この御靈驗あつたればこそ、大師の德風が遂に九重の雲深き邊にまで達し、特に時

の帝後醍醐天皇から十種の勅問を垂れさせられ、格別の御歸依を受けさせられ、應て大本山總持寺發祥の因ともなつたのであります。

我が曹洞宗に此の如き尊き因緣のあることは、誠に有難い次第でありまして、お互に高祖、太祖の御流れを汲んで居る者は、この御報恩のためにでも、羅漢尊者を御供養申して然るべきである。況んや、遺法護持の尊い御因緣あるに於てをやであります。明治天皇の御製に、

神代なる神のをしへを違へじと
思ふはおのが誓ひなりけり

とあります。畏れ多くも陛下は、古き神代の敎、即ち天照皇大神の御聖誥、神武天皇の御宏範、建國の精神であります。それを其のまゝ踏み違へぬやうにするを以て、陛下自らの御精神と遊ばされたのであります、實に尊い大御心であります。然るに往々、陛下の大御心も知らずして、新しい時代、新しい學問に編れ、我が建國の

精神を忘れて、ともすれば誤つた考へを持つ人があると申すことであります、實に國家のために憂ふべきであります。この道こそ「敎育勅語」に『斯ノ道ハ、實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ、子孫臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所、之ヲ古今ニ通シテ謬ラス、之ヲ中外ニ施シテ悖ラス』と仰せ出されたものにして、誠に萬世不變の大道であります。この古くして變りなき神代の道を、今日の新しい時代に適用して行くのが卽ち、學問の力であります。この陛下の大御心を、畏れながら我が佛敎に比較すると、恰も羅漢尊者の遺法護持と一つであります。陛下の大御心、一代の御鴻績、我が國運の發展したる樣子、そのまゝ羅漢尊者が佛法守護のお働きであります。私共は、畏れながら、陛下を活ける日本中興の羅漢尊者として、御信仰申したいのであります。限りなき明治の御代の聖德に浴して、陛下の御仁慈を倍々有難く感謝すると共に、羅漢尊者が遺法護持の御德をも、亦有難く感謝するのであります。

日本中興の羅漢

二　名號の譯義

羅漢尊者の應現は、お釋迦樣の御遺囑に依つて、末世の佛法護持のためであります。而してお釋迦樣のお說きになつた佛法は、誠に廣大にして、八萬四千の法門、五千四十餘卷の經文ありと雖も、世法卽佛法で、活けるこの社會を離れて外に佛法はないのであります。從つて佛樣と云ふも『人間の如來は、人間に同ぜるが如し』で、眼は橫に鼻は直、我々と少しも變りはないのであります。それを佛樣と云へば、直ぐ金碧燦爛たる木像畫像と思ひ、お寺の本堂か佛壇の中にのみ在すやうに考へるのは、大へんな心得違ひであります。それと共に、羅漢尊者も亦元々お釋迦樣のお弟子でありますから、これも亦お互と少しも變らぬ人間の身を持つて居らるゝのであります。それが唯修業の功德に依つて、人間の姿そのまゝにして尊い羅漢の位に上られたのであります。その道理を明かにするには、先づ羅漢と云ふ其の言葉の義理

人間の如來

からお話せねばなりませぬ。

普通に羅漢〳〵と申してをりますが、委しく申せば阿羅漢と云ふのであります。その阿羅漢と云ふのは梵語、即ち印度語であります。その語の中には色々な意味が含まれて居るので、迚も簡單に譯することが出來ぬのであります。故に原語のまゝ羅漢〳〵と用ひて居るのであります。それを譯すると、殺賊。不生。應供の三つの大なる義理を示して居るのであります。これを一々説明すると、先づ、

殺賊

殺賊とは、煩惱の賊を殺し滅して終つたからであります。賊は他人の寶を盜み取るものである。煩惱も亦その通り、八萬四千と云ふ同勢を引伴れて、人々本具の佛性、お互の持つてをる智慧道德の寶を盜み取るのである。凡夫はこの煩惱の賊のために、大切な智慧道德の寶を盜み取られて終つて、冥より冥に、闇より闇に迷つて居るのであります。然るに羅漢尊者は、『大智度論』には『殺賊は破惡に從つて名を得たり』とあつて、お釋迦樣のお弟子として比丘の姿で、修行に依つて有らゆる惡

を破つたのが、即ち阿羅漢であるから殺賊と譯するのであります。

不生とは、或は無生とも云ひます。三界生死の原因たる煩惱惡業を斷じ盡して、再び此の三界に生を受けぬからであります。煩惱の賊の恐ろしい事は、凡夫も能く知つて居るから、どうかして捉へよう、殺さうと思ふが、中々それまでの辛抱が出來ぬ。偶ま精進勇猛にして、殺した者もあつたが、眞實、殺し切つてないために、今度は却て仇をすることが酷い。そこになると流石は羅漢尊者で、左樣の心配のないやうに、賊を殺し切つて終つたのである。これも亦『大智度論』には『不生は、怖魔に從つて以て稱を受けたり』とあつて、魔王が、此羅漢は三界解脫の身で、惡魔の支配を受けざるのみか、却て一切の惡魔を降伏する威力を有する聖者なりとて、非常に出家受戒せし比丘を怖るゝからであります。

應供とは。既に貪慾、恚瞋、愚痴等の煩惱の賊を殺し盡して、其無漏の智慧德相を具へ、功德を滿足せし聖者なれば、世間の福田となつて、他の供養に應ずるだけ

の資格を有し給ふと云ふ意味であります。その福田とは、この人に供養すれば、その功德に依つて、供養者が、福德利益を受くること、恰も田地の物を生ずるが如きに譬へたのである。これも亦『大智度論』には『應供は、乞士に因つて以て德を成す』とあつて、比丘としては、托鉢して人の供養を受くる丈の大德を具へて居らるゝからである。德に依つて、この力を供へるのであります。

因果對譯

阿羅漢の一語の中には、右の通り三つの義が含まれて居つて、殺賊、不生、應供の三つは、恰も破惡。怖魔。乞士の三義と互に一致するのである。それは因果對譯と云つて、因の時には比丘といひ、果に至つて阿羅漢といふのである。而して比丘がそのまゝ阿羅漢となつたものであるから、お互の名に關係があるのである。この三義が更に如來の恩德、斷德、智德の三德に相應して行くのであります。

恩德

恩德とは、『如來、大願力に乘じて衆生を救護すること猶ほ赤子の如し』とあつて、佛樣は誠に廣大なる御慈悲を以て、『三界は皆我が有なり、この中の衆生は皆是れ吾が子なり』とも法華經に仰せられあつて、お互一切衆生を愛せらるゝこと、猶ほ親が子を可愛がる如く、實に『人の親の心は闇にあらねども、子を思ふみちに迷ひぬるかな』と古歌にもある如く、一方ならぬ御苦勞を下されて居るのであります。その恩德は、恰も羅漢尊者が、衆生のために福田の利益を與へ給ふ應供のお働きであります。

如來三德

斷德

斷德とは、『如來は一切の煩惱惑業を斷除し、淨盡して餘すこと無し』とありまして。それは說明するまでもなく、阿羅漢の殺賊に當るのであります。それから、

智德

智德とは、『如來は平等の智慧を以て、一切諸法を照了すること圓融無礙なり』とあります。これは阿羅漢の不生に當るので、阿羅漢が煩惱を斷じ盡くして、再びこの三界に生を受けぬと云ふのは卽ち智慧の働きであります。或は因位の比丘にあつて惡魔が怖れるのも、亦、受戒出家の人の智德に怖れるのであります。而して羅漢尊者が神變不思議なる神通妙用は、悉く是れ智慧の働きならぬはない。この智慧

元政上人の羅漢尊者の智慧

のことに就いて、斯う云ふ話がある。、

深草の元政上人と云へば、日蓮宗の高僧で、實に學德兼備のお方であつた。殊に非常に孝心の深いお方で、『惜からぬ身ぞ惜まるゝたらちねの、親の殘せる形見と思へば』と詠まれ、親の形見として最もこの身を大切にせられた。上人が或る年、奥州の山寺へ遊ばれた。こゝに有名な兆殿司の描いた十六羅漢の像があつた。見ると、恐ろしい龍や鬼を使役つて御座る。迚も人間技ではない。そこで或る人が元政上人に問うた。『如何に羅漢樣でも、實際こんな事が出來ませうか』と。上人は平然として答へて『あ、出來るとも。。お前は、彼の牛を知つて居るだらう。牛は身體が肥大つて力がある。迚も我々人間の五人力や十人力ではない。その强い牛を、牛飼が使ふ時には、恰も羊を使ふが如く樂に使つて居る。これは何が故か、外ではない。情ない哉、牛は畜生で痴鈍である。それに反して人は萬物の靈長として智慧が優れて居る。その優れた智慧があるから、力では迚も及ばぬ牛を自由に使つて行くのである。智慧さへ優れてゐたならば、如何なる物でも自由に使へるのである。決して不思議はない、それを不思議に思ふのは、自分の小さい智慧を以て、漫に人を度るからである。今、羅漢尊者が廣大なる智慧神通力あつて、恐ろしい龍鬼をも使ひ給ふと云つても、決して驚くに足らない』とお話になつたと云ふことであります。子供は大人の智慧を想像することが出來ぬ如く、お互凡夫の心を以ては、羅漢尊者の廣大なる智慧を迚も想像することが出來ませぬ、この道理を聽いて見れば、成る程と合點が出來のであります。

三德と三義と三行

以上の如く、如來の三德と、阿羅漢の三義と、比丘の三行とは、互に相關係するのであります。これを圖に示すと、

（阿羅漢）　（比丘）　（如來）

殺賊　破惡　斷德

不生　怖魔　智德

應供――乞士――恩德

となつて、誠に明瞭であります。更にこれを倫理(斷德)教育(智德)信仰(恩德)に併せて見れば、益々羅漢尊者の意義が了解せらるゝのであります。故に羅漢尊者を信仰の對象とすれば、決して迷信的な、無意義な偶像でないことが解ります。羅漢尊者にこの偉大なる力と德とあればこそ、能く還法護持の大任が果せるのであります。

羅漢の階級

然るに、佛教には大乘、小乘の區別がありまして、小乘は低級なもので、元より大乘の高尚には及ばぬのであります。それから又、證果の階段にいろ〳〵澤山ありまして、その中で聲聞、緣覺、菩薩、佛とありまして、佛樣になるまでには五十二位の階級を經ねばならぬのであります。而して羅漢尊者は、まだ聲聞の位であります。聲聞の位の中にも四段あつて、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢と次第に登つて行くのでありますから、羅漢尊者は聲聞中の最上位でありまして、これを以て小乘の修行者が、悟了到達する極位としてあります。故に大乘佛教から見れば、羅漢尊者の地位は甚だ低く、至つて幼稚なやうに見えます。が、そこが羅漢尊者の有難い所で、御經にも『內秘菩薩行、外現是聲聞』とあつて、當り前ならば、直ぐ佛の位に登る菩薩となるべきであるが、唯衆生教化、還法護持のために、心の內に尊い菩薩の行を秘して、假りに身分の低い聲聞の姿を現はされて居るのであります。是は世間の政黨や會社、又は商店の事に考へても能く解る事で、政黨が內閣を組織する。あの人は人望と手腕と閱歷と力量とに於て、當然、入閣して內務か文部か何れかの大臣の椅子に就く人だと輿論が決つてゐても、さて其の人に入閣されては、議會の場合に、議場の整理、懸引、議員の操縱をする政黨の大任は、ドウしても彼の男でなくてはならぬとなると、唯自分の名譽や地位のみは考へて居れぬ、我が黨の爲に自分を犧牲にして、大臣の椅子は人に讓り、自らは一介の平議員として、益々我が黨のために、大責任を負つて働くと云ふ人がある。誠にその政黨のために大恩人、大功勞者と云ふべきである、これが卽ち羅漢尊者である。會社にしても亦さうで、好い地

外現是聲聞

世間の羅漢

位を人に讓つて、自分は骨身惜まず獻身的に、會社のために働く忠實な人もある。商店にしてもさうで、自分の自由や我まゝを希はず、何時までも一個の番頭として、主人大事、お店大切に働いて居る人もある。これ皆實に世間の羅漢尊者である。

羅漢尊者は、もと〳〵殺賊の意に於いて、大解脱を得。不生の意に於いて、大智慧を得。應供の意に於いて大道德を併せて、體現せられたる大乘の聖者であります

學佛者の極果

が、姑らく爲人度生のために、小乘聲聞の姿を現はされたのであります。この道理を能く能く合點しないと、羅漢尊者の尊い大慈悲を知ることが出來ませぬ。これを承陽大師は、『正法眼藏』阿羅漢の卷に、

諸漏已盡、無二復煩惱一。逮二得已利一、盡二諸有結一、心得二自在一。コレ大阿羅漢ナリ、學佛者ノ極果ナリ、第四果トナック、佛阿羅漢ナリ。

とお示しになつた。『學佛者ノ極果ナリ』と仰せられた、決して小乘聲聞の證果とのみ見てはならぬのであります。更に又、

承陽大師の羅漢信仰

阿羅漢ノ神通智慧、禪定說法、化導放光等、サラニ外道天魔道ノ論ニヒトシカルベカラズ。見百佛世界等ノ論、カナラズ凡夫ノ見解ニ準ズベカラズ。將謂胡鬚赤更有赤鬚胡ノ道理ナリ。

とも仰せられた。羅漢尊者の神通妙用を以て、近頃流行の心靈術とか、又は西洋手品などと一緒にしてはならぬ。全く不可思議の神通妙用であります。次で又、

古云、聲聞經中、稱二阿羅漢一、名爲二佛地一。イマノ道着、コレ佛道ノ證明ナリ、論師胸臆ノ說ノミニアラズ。佛道ノ通軌アリ、阿羅漢ヲ稱シテ佛地トスル道理ヲモ參學スベシ、佛地ヲ稱シテ阿羅漢トスル道理ヲ參學スベキナリ。阿羅漢果ノホカニ、一塵一法ノ剩法アラズ、イハンヤ三藐三菩提アランヤ。阿耨多羅三藐三菩提ノホカニ、サラニ一塵一法ノ剩法アラズ、イハンヤ四向四果アランヤ云々

と、御提撕になつてをる。阿羅漢を以て大乘の聖者たることを、最も親切に御示し下さつてをる。承陽大師が暖皮肉、活骨髓たる『正法眼藏』九十五卷の中に、特にこ

の阿羅漢の卷があることは、如何に大師が羅漢尊者の御信仰を持たせられたかを、拜察するに難からぬのであります。特にこの阿羅漢の卷は、仁治三年五月、大師御齡四十三歳の折、宇治の興聖寺に於いて御示しになつたので、永平寺に於ける羅漢尊者の應現に先つこと正に七年であります。これ等に依つて見ても、大師が常に羅漢尊者の御信仰あつたことが伺はれるのであります。かた〳〵我が曹洞宗には誠に御因縁が深いのであります。

應供諷經

これ等の御因縁に依つて、處々の寺々にも羅漢尊者が御祀りせられ、羅漢供養の法會等が行はれるのみならず、お寺の毎朝の御勤めの中にも、特に『應供諷經』と申して、羅漢尊者御回向のために、心經を讀むことになつてをります。その回向文が誠に有難いのでありますから、こゝに御聞かせ申しませう。

仰ぎ冀くは三寶、俯して感應を垂れ給へ。上來、般若心經を諷誦す、集る所の功德は、十方常住の三寶、果海無量の賢聖、十六大阿羅漢、一切の應供部類眷屬に回向す、冀ふ所は、三明六通、末法を正法に回へし。五力八解、群生を無生に導き、山門の二輪、常に轉じ、國土の三災、永く消せんことを。

遺法護持の結果

と云ふのであります。抑も羅漢尊者應現の目的は、佛樣の御遺囑に依つて、遺法を護持し給ふにあると云へば、その結果は何うであるか。『三寶興隆すれば國家興隆す』で、佛法が隆んになればなるほど、國家はます〳〵隆んになるのであります。即ち羅漢尊者の持たせらるゝ、三明とか六通とか、或は五力とか八解とか云ふ廣大なる御德に依つて、末法の今日をして、再び正法の時代の如く隆んならしめ、迷へる群生をして、悟りの境界たる無生に導き。各寺々の法輪も食輪も共に轉じ、國家に起る天災地變、水災、火災、兵災等もなく、天下泰平にして益々文明發達し、國運隆盛なることを祈るのであります。

これに依つて見ますと、羅漢尊者の信仰は、實に國家的であります。個人的の小さき信仰にあらずして、實に大なる國家的信仰であります。世界無比なる我が皇室

國家的信仰

と佛敎、佛敎と日本との歷史的關係を知る者は、正にこの羅漢尊者の信仰に、重大なる意義あることをも知らねばなりませぬ。佛敎は世界的宗敎なると共に、また國家的宗敎である。而してまた個人的宗敎であります。個人と國家と世界卽ち人道との三つは、正に相圓融せねばなりませぬ。これが能く完全に圓融して、初めて眞に宗敎の權威があります、徒に世界、人道のみを說いて、國家を忘るゝ宗敎は、實に危險であります。尊い羅漢尊者の國家的信仰は、最も熾烈なる我が日本の國家的精神と、誠に能く一致するのであります。これ等の點からも、羅漢尊者の信仰は自ら盛んになつたのであるうと思ひます。

三　無邊の神通

狩野一信の發願

芝の增上寺に、狩野一信の描いた五百羅漢があります。これは一信が一代の傑作で、美術品としても誠に優秀れたもので、將來は必ず國寶となるべきものであると云はれてをります。抑も一信がこの五百羅漢を描くに至つたに就いては、最も敬虔な信仰談があるのであります。

一信は、自分が畫工となつた甲斐には、ドウかして末代まで我が名を留めたいと頻りに思つてゐた。それには何よりも丹誠籠めた大作を、何處かのお寺へ納めるに限る。さうぢや、これから自分が畢生の腕を揮ひ、一代の事業として五百羅漢を描きたい、と決心したが、夫れには少くも十年間はかゝる。それに御金も三千兩は入らうと云ふのである。一信は妻のお判と二人で貧ましい生活の中、迚も〳〵その心願を成就することは覺束ない。遂に江戸から遙々と成田の不動樣に詣り、三七二十

一日の間參籠し、初めの二七日は斷食し、後の一七日は手燈を燈し、何卒我が五百羅漢拜寫の大願を成就するために、一人の檀那、大施主に遇はせ給へと、一心に祈願したのであります。一信は心ゆくばかり祈願を籠め、聽て滿願の日も果てたので、とぼ〳〵と江戸へ歸つて來ましたが、祈願空しからず、不思議なる哉、こゝに一人の大檀那に遇ふことが出來たのであります。

了瑩上人の隨喜

時に增上寺山内の一老に、源興院の了瑩上人と云ふがあつた。瓦一枚落ちても大名が世話して呉れた昔のことでありますから、增上寺の山内などは、何れも大した勢でありました。了瑩上人も平生、豐かな生活をして居られましたが、何か法のためになる仕事をしたいと頻りに考へて居らるゝ折も折、晝のことで一信に遇ひ、偶々その志を聽いて、非常に感激せられ、『あゝ夫れは結構なことである。能くもその大願を發された、好矣、左樣ならばこの了瑩が、及ばずながら施主となつて、三千兩のお金を世話しよう』と云はれた。一信は夢かとばかり驚き且つ喜び、これ偏に不動尊の御利生と、遙に成田の方を拜んで御禮を申した。了瑩上人も出家の身、豐かなりとは云へ、それほど大枚のお金は無い。自分の衣資を殺いで、十年間にドウしても造つて遣ると云はれたので、一信もこゝに勇氣を得、萬事を放下し、敬虔なる信仰と非常なる努力を以て、愈々五百羅漢に筆を染めたのが嘉永七年の春、一信正に三十歳の時でありました。

迦上人の師志相續

然るに何の不運ぞや、了瑩上人は、その年の秋、俄に遷化なられた。一信の悲嘆は譬ふるに物なく、機緣未だ熟せずして我が大願を成就する能はざるかと慟哭しましたが、有難いことには、佛祖諸天は未だこの人を捨て給はず、新に源興院の住職となられたのは、了瑩上人の弟子亮迦上人であつた。年はまだ二十三の若年であつたが、殊に師恩孝行の人であつたから、深く師匠の願心に隨喜せられ、その志を續ぎ、師匠に代つて祢が世話する、然れば一は師匠への報恩となり、二には一信の助化ともなるからと、勇健にも之れを誓はれた。一信は再び勇氣を鼓して腕を揮つ

た。一信は信仰の人であつた。初め成田山に參籠してこの大檀那を得たが、愈々その筆を採る朝からは、毎朝芝の大門邊に住んでゐたが、そこから淺草までテク〳〵歩いて、淺草の觀音樣に日參して、何卒、この五百羅漢拜寫の大願、無事に成就するやう、大檀那の身にも、自分の身にも又は妻の身にも障りのないやうにと祈誓をしたのでありました。それから歸つて來ては描いたと云ふことである。この信仰あつたればこそ、能く彼の大願を成就したのであります。

大雲上人の指導

丁度その頃、增上寺の學頭に大雲上人と云ふがあつた、非常な博學な方であつた。一信のために語つて、『若し卿が畢生の腕を揮つて、百代に殘る物を描くならば、その尊い精神と共に、畫風圖態の考證にも遺漏なきやうにせねばならぬ。衲がこれまで多く見た羅漢尊者は、大方、支那風で、支那の衣服であるが、羅漢尊者は元と釋尊のお弟子で天竺に應現されたものであるから、天竺風でなければならぬ筈である。衲が先年武州の金澤稱名寺で、禪月大師の十六羅漢を見たが、是は全く天竺風であつた。卿も描くなら天竺風に描くが好い』と注意を與へられた。一信も深く之れに感じましたので、それより大雲上人を師匠と仰ぎ、その構圖上から梵相風儀に到るまで、一切指圖を受けたのであります。上人も眞面目な人であるから、時間惜まず研究すべきものは研究し、考證すべきものは考證されて、最も親切に指導せられたのであります。故に增上寺の五百羅漢は、當時としては最も新しい畫風なると共に、有力なる典故に依り、舊套を脫して、隨分大膽な試みをしたのであります。この點だけでも實に立派な作品であります。

五百羅漢の新研究

一信は大雲上人の指導と激勵とを得て、何等の粉本に依らず、最も清新にして獨創な五百羅漢を描かうと、更に人知れず苦辛した。先づ一幅に五尊者宛百幅に分けて描き上げることにした。この百幅に、人間世界は勿論のこと、地獄から修羅まで六道攝化の次第を顯はし、人間界としては大工、左官、鍛冶屋は勿論、瓦屋から石屋。吳服屋から卜筮、浴室から剃除、地震から暴風、劫盜から疫病、戰爭から監獄、

活社會の教訓

さては燒香、說法、禮拜、看經より飛雲、定坐、逐鬼、伏魔に至るまで、有りと有らゆるもの 悉く描かれないはない。この間に草木花卉、鳥獸蟲魚に至るまで、實に微細を極めて寫生的に描き入れてある。而うして盡十方世界、悉く羅漢尊者の一大光明中に攝取せられて居ることを示した。實に能く描いたものであります。この五百羅漢を拜しては、啻に一信が敬虔なる信仰と異常なる努力に驚くのみならずその着想と構圖が最も清新にして、羅漢尊者は決して遠き古の人にもあらず、遙なる他土の人にもあらず。全く世間に現住せられて、お互が眼に見、耳に聽くこと、悉くその遊戯神通ならざるはない。羅漢尊者が無量無邊の神通妙用は、お互が日用の萬事を離れ卽ちこの活社會を離れて、決して外にないことを、最も熱心に敎へた所が、實に尊いのであります。

一信は、世間の交際も絶ち、花見遊山も忘れ、唯羅漢尊者のために一身を捧げ、自ら活ける羅漢となつて一心不亂に描いた。夢の間に春と過ぎ秋と暮れて、早や十

一代の丹誠

妻お判の内助

三年餘りも苦勞に苦勞をしたので、何時しか肺を惡くした。が、熱心なる一信はこれを描き上げるまではと、血を喀いても尙ほ臥なかつた。今は九十六枚を描き上げた。モウ四枚だ、それも下圖は出來上つたので、殘るは着色のみだ、早う之れを仕上げて〳〵と勉めて居つたが、病は次第に重るばかり、前世の宿業が、文久三年九月二十二日、僅か四十二歲を一期として、畫筆を握りつゝ逝くなつた。

一信がこの大心願を成就せしめたる大檀那は、申すまでもなく了瑩、亮迪の二上人でありますが 一信をして一心不亂に畫筆を採らしめて、毫も家事のことに心配せしめなかつたのは妻のお判であります。その成就に就ては、お判が內助の功最も多きを思はねばならぬ。お判は一信の歿後、剃髮して妙安と唱へた。五百羅漢は弟子等に依つて四幅も彩色せられ、軈て西陣織地で立派な表裝もせられ、遂に亮迪上人から增上寺へ奉納せられた。妙安尼は纖弱い女の腕で四方の信者に勸化して、增上寺內に羅漢堂を建立し、亡き夫の暖皮骨たるその尊像をこゝに祀つて、生ける人に

仕へる如く、三時の勤行も怠らなかつたが、つひ近年に至つて逝くなつた。

長々と一信の苦心談を語るのは外でもない、羅漢尊者の遊戯神通と云へば、何か變つたことのやうに思ひ、或は又羅漢尊者など申せば、何れもこの世に用事のない人のやうに思ふものが多いのであるが、決して左様ではない、世間法を離れて佛法はない。この世の中を離れて神通妙用もないことを敎へたのである。前の回向文にあつた『三明六通、末法を正法に回し』と云ふその三明、六通とは何か。『五力八解、群生を無生に導き』とある五力八解とは何か、これを知らねば羅漢尊者が無邊の神通も合點が出來ぬ。それで先づ

三明とは、一に宿命明。二に天眼明。三に漏盡明である。宿命明とは、宿世卽ち先の世の事が一切能く解る力である。天眼明とは、人の思つて居ること、考へて居ること、仕へ居ることから、死んでから先のことまで能く解る力。漏盡明、漏は煩惱である、故にこれは阿羅漢の譯義たる殺賊と同じ意である。卽ち煩惱を斷じ盡し

て終つて再びこの三界に生れて來ぬと云ふ力である。

六通とは、六神通と云ふの略である。六神通とは、一に天眼通。二に天耳通。三に知他心通。四に宿命通。五に身如意通。六に漏盡通である。この中、第一の天眼通。第四の宿命通。第六の漏盡道は前の三明と同じである。第二の天耳通は、六道の衆生が苦樂憂喜の言葉から世間種々の聲、鳥獸蟲魚の聲まで能く解るのである。公冶長が雀の聲を聽き分けたのは此の天耳通の一分であらう。第三の知他心通は六道の一切衆生が心の中に思つてをることが能く解るのである。第五の身如意通は讀んで字の如く、この身が思ふまゝになるので、雲に乘り風を驅り、天上でも空中でも自由自在に飛び廻り、山も海も自由自在に踰る、大きくならうと思へば大きく、小さくならうと思へば、小さく、變現自在である。これが神通力である。そんなこと言へば、人は化物のやうに思ふであらうが、ワットが蒸氣を發明して、大海に鐵船を浮べ、陸に汽車を走らせる是れ卽ち神通力である。スミスが來て飛行機の宙返り

を遣る、是れ卽ち身如意通の小さいやつである。お互に今日は別にそれを驚かぬが、五十年前にこんな話をしたならば直ぐキリシタンぢやと思つたのである。これから百年も經ち、世がまた〳〵文明に赴いたならば、或は三明も六通も決して不思議に思はぬのみならず、彼の人も三明を得た、この人も六通を得たと云ふやうになつて活ける羅漢尊者が澤山出來るかも知れぬ。その神通と云ふは『瓔珞經』に、

神は天心に名け、通は慧性に名く。天然の慧、徹照して無礙なり、故に神通と名く。

とあります。決して不思議なことを云ふのではない。これを不思議と云ふのは、自分の智慧が足らぬからである。元政上人のお話も亦この道理である。

五力とは、五根の堅固に增長したものである。五根とは、お互法門を聽取して信仰の芽が萌いて來る。それが段々と培養せられて善根が張つて更に動かぬやうになる、その樣子を木が根を張つたに譬へて、根と云ふのである。その第一が信根。二

が精進根。三が念根。四が定根。五が慧根である。この五つの善根が生じても、心の惡がまだ殘つて居る、そこで更に修習して、その根をしてます〳〵增長せしめ、惡を破するのが卽ち五力であるから、五根の增長したのが卽ち五力である。依つて一が信力。二が精進力。三が念力。四が定力。五が慧力である信力とは、信根が增長して、諸〳〵の煩惱のために心を動かさるゝことが無いのである。精進力とは、精進根が增長して、能く身心の懈怠を除き、出世の法を成辨するのである。念力とは、念根增長して、能く諸〳〵の邪想を破し、一切出世正念の功德を成就するのである。定力とは、定根增長して、能く諸〳〵の亂想を破し、諸〳〵の事理の禪定を發するのである。慧力とは、慧根增長して、能く一切邪妄の執を除き、一切偏小の慧を破するのである。

八解とは、八解脫の略したのである。八解脫は證果の階段で、八背捨と云ふを行ずる時卽ち得る證果である。一には內有色相外觀色で、自分の身を不淨にして朽ち

果つるものなれば決して愛樂すべからざるを觀じ、また他人の身に就いても不淨を觀ずるのである。二には内無色相外觀色で、既に自分の身に就いて悟り切つて自分の身を認めず、更に他人をして不淨觀を生ぜしむるのである。三には淨背捨身作證で、定中において地、水、火、風、青、黄、赤、白の八色を練習して、光明の清淨皎潔なること妙寶の色の如くならしめ、從つて心既に明淨にして樂漸く增長し、遍身ために怡悅するのである。四には虛空所背捨で、一心に空を緣じて心空と相應し、無邊虛空處定に入りて、更に八淨の色を見ざるのである。五には識背捨で、一心に識を緣じて定に入り、五蘊等はみな苦、空、無常なりと觀じて、また空を見ざるのである。六には無所有處背捨で、識處を捨てゝ一心に無處有處を緣じて定に入り、五蘊等はみな苦、空、無常、無我なりと觀じ、心に厭背を生じて着せざるのである。七には非有想非無想所背捨で、一心に非有想非無想を緣じ、無所有處を緣ぜず、定に入りて苦、空、無常、無我を觀じて愛着せざるのである。八には感受想背

で、心の散亂を厭うて入定休息せんと欲する故に五蘊中の受と想との諸心を滅すのである。この八解脫は大へん面倒であるが要するに羅漢尊者の尊い境界である。

三明、六通と云ひ、五力、八解と云ひ、何れも羅漢尊者の境界と御力である。これ等の偉大なる御力あつて、無量無邊の神通妙用が現はれるのであるが、この道理が明瞭になれば、決して不思議はないのである、而して又阿羅漢の三義たる殺賊、不生、應供の意味が一層明かになることゝ思ふ。

四　得樂の方便

羅漢尊者が常に無邊の神通を示さるゝは、畢竟、得樂の方便で、世のため人のために、安樂を得せしめんとの慈悲方便で、千差萬別に應現せらるゝのである。故に方便の應現。

に或る時は機關手となつて汽車汽船に乘込まれ、或る時は活版所の職工となり校正係となつて、新聞や雜誌新刊物の手傳ひもされ、或は鑛山に入つて坑夫ともなり、或は大工や左官となつて働かれ、又は會社員となり事務員となり、又は學校の先生となり、醫者となり、商人となり農夫となり、或は巡査となり、刑事となり、檢事となり裁判官ともなり、又は世界平和のため、人道のためと云へば、兵士となつて戰場に働かるゝこともあれば、砲兵工廠の職工となつて武器の製造にも從事せらるのである。羅漢尊者は、有らゆる場所に有らゆる身を現じて、常に一切衆生を利益し給ふのである。この善巧方便を能く合點した一人は、江戸時代の戯作者として

日本第一流の大文章家と謳はれた瀧澤馬琴である。

文豪馬琴と羅漢尊者の因緣は面白い。その馬琴が一代の心血を灑いで書いたは云ふまでもなく、『里見八犬傳』である。馬琴は自ら『吾を知る者は、其れ唯八犬傳か吾れを知らざる者も其れ唯八犬傳か』と云つた位である。その八犬傳の第九輯、下帙下套之中後序に、

大凡、經籍詞章の學びは、和漢の先哲、丁寧に注疏して、學者を敎導くものから世俗は皆敎を厭うて、無用の空言を歡び、或は又奇を好みて、人の好歹を聽まく欲す。こゝをもて、達者の戯墨に遊べるや、事を凡近に取て、誼を勸懲に發し、空言以俗塵の惑ひを覺す者、水滸。西遊。三國演義。平山冷燕。兩婚夫傳の五奇書あり。文章巧致、至奇至妙。其深意を推考ふれば則ち齊諧を鼻祖とし、反て三敎の旨に違はず、釋氏の所謂善巧方便、五百の阿羅漢。二十五の菩薩の功德に伯仲す、といふとも過たりとすべからず。

と書いてをる、高尚な原理を通俗な筆に任せて、自ら儒教主義の理想小說を書くことを以て、羅漢尊者の應現、方便と、その功德に相違はないと云うて居る。誠に左うである。羅漢尊者は、勸善懲惡のため社會啓導のためには、小說家ともなり、脚本家ともならるれば、俳優となつて芝居もされる。馬琴が八犬傳を書いて居る時には、羅漢尊者が馬琴となつて其筆を運ばれたのである。馬琴卽ち羅漢尊者である。

我等と共に在り

この外に羅漢尊者を求めるから、却つて容易に得られなくなるのである。道は邇きにあり、之れを遠きに求めるのが凡夫の淺猿しさである。羅漢尊者は常に我々お互と共に在すのであるが、それを凡夫は外に尋ねて迷つてをるのである。盡十方世界悉く羅漢尊者の光明中に包まれて、全世界悉く羅漢尊者の在し給はざる所はないのである。故に羅漢尊者の數は無量無邊である。

羅漢尊者と云へば、先づ第一が十六大阿羅漢、それから十八大阿羅漢である。十六や十八は方々にあるが、珍らしいのになると五十三大阿羅漢と云ふがある。これは支那にあつて、黃檗宗開山隱元禪師の師匠費隱禪師の讚がある。又支那、懷安の大中寺には八百大阿羅漢があると云ふことである。五百大阿羅漢は到る所にあるが房州の日本寺は千二百大阿羅漢である。これも亦珍らしい。日本寺は有名な鋸山の一角にあつて乾坤山と號し、その名に背かず、如何にも雄大な境致である。その絕頂は十州一覽臺と云つて、關東八州の外更に駿河から甲州の十ケ國を一目に見る絕景である、日本の杜甫とも稱せられた梁川星巖がこゝに遊んで『三千世界歸孤掌。五百仙人共半峯』と云ふ名句を留めたが、羅漢尊者と云へば何處でも五百羅漢と相場が決つて居るので、千二百大羅漢なることを忘れたのである。增上寺の行誡上人がこの日本寺へ參詣せられ、千二百大羅漢と聽いて御詠みになつた歌に、

羅漢の數別

乾坤山日本寺

塵の世のはるよ何せむ庭くさも
あらかむばしな法のはなその

とあります。匂ひ香ばしき庭の草花も、悉く千二百大羅漢の姿であるとの意であ

ります。縱令、千二百にしても、日々夜々全世界に應現せらるゝには、迚も手が足らぬ道理である。そこで羅漢尊者は各々無數の眷屬を引伴れて御座る。

羅漢尊者のことは、『大阿羅漢難提密多尊者所說法住記』と云ふが、一切藏經の中にあつて非常に委しく說いてある。その『法住記』に依ると、十六羅漢の御名は勿論、御出になる所から眷屬の數までも擧げてある。まづ

法住記と十六羅漢名號

第一　賓度羅跋囉惰闍尊者。西瞿陀尼洲に在して、一千人の眷屬を引伴れ給ふ。

第二　迦諾迦伐蹉尊者。迦濕彌羅國に住し給うて、五百人の眷屬を引伴れ給ふ。

第三　迦惰跋釐惰闍尊者。東勝身洲に住し給うて、六百人の眷屬を引伴れ給ふ。

第四　蘇頻陀尊者。北俱盧洲に住し給うて、七百人の眷屬を引伴れ給ふ。

第五　諾詎羅尊者。南贍部洲に住し給うて、八百人の眷屬を引伴れ給ふ。

第六　飜陀羅尊者。軋沒羅洲に住し給うて、九百人の眷屬を引伴れ給ふ。

第七　迦理迦尊者。僧伽荼洲に住し給うて、一千人の眷屬を引伴れ給ふ。

第八　伐闍羅弗多羅尊者。鉢剌多拏洲に住し給うて、一千一百人の眷屬を引伴れ給ふ。

第九　戎博迦尊者。香醉山中に住し給うて、九百人の眷屬を引伴れ給ふ。

第十　半託迦尊者。三十三天に住し給うて、一千三百人の眷屬を引伴れ給ふ。

第十一　羅怙羅尊者。畢利颯瞿洲に住し給うて、一千一百人の眷屬を引伴れ給ふ。

第十二　那迦犀那尊者。半度波山中に住し給うて、一千二百人の眷屬を引伴れ給ふ。

第十三　因揭陀尊者。廣脇山中に住し給うて、一千三百人の眷屬を引伴れ給ふ。

第十四　伐那波斯尊者。可住山中に住し給うて、一千四百人の眷屬を引伴れ給ふ。

第十五　阿氏多尊者。鷲峰山中に住し給うて、一千五百人の眷屬を引伴れ給ふ。

第十六　住荼半託迦尊者。持軸山中に住し給うて、一千六百人の眷屬を引伴れ給ふ。

五百羅漢名號

と書いてある。これを通計すると一萬六千九百人の眷屬であるが、更に五百羅漢は五百羅漢で亦各々眷屬があり、之れを合せて總て九十九億の眷屬があると申します。この九十九億の眷屬が各々羅漢尊者の一分として社會に活動せられるから、初めて羅漢尊者の神通妙用が現はれるのである。

五百羅漢尊者に就いては『乾明院五百羅漢名號碑』と云ふが大明續藏經の中に入つてゐて、その御名號がある。面山禪師は『羅漢應驗傳』の中に、これは後人の虛構であると書かれましたが、既に久しい以前から世間に傳はつてをるものであるから、その作者は誰にしても尊いものであります。その名は何れにしても、佛在世及びその滅後に五百羅漢の居られたことは事實である。彼の『阿毘達磨大毘婆娑論』二百卷は、正しく五百羅漢の編述せられたもの、又『阿毘曇毘婆娑論』八十卷も、迦旃延尊者の造られたもので、五百羅漢の註釋せられたのがある。又『舍利弗問經』の中にも、五百羅漢に關することが說いてある。その外いろ〳〵な經文に羅漢尊者

行誠上人の護法方軌

のことが說いてあります。從つて又色々な型の羅漢尊者があつて、我が國へも佛敎の傳來と共に傳へられて居るので、奈良朝時代の史料の中にも色々ある。羅漢尊者のその數は、十六でも五百でも或は千二百でも好い、又これが一つでも好い。一つだから少いと云ふわけでもなく、千二百だから多いと云ふ譯でもない。一人でもその働きは無量無邊なれば、千二百人でも同じく無量無邊の働きである。多いから有難くて、少いから有難くない道理はない。唯羅漢尊者が善巧方便を能く合點すれば、それで頂禮の甲斐ありと云ふべきである。

增上寺の福田行誠上人は、明治時代の一大高僧でありましたが、夙に羅漢尊者を御信仰なされ、惡魔降伏と正法利益を感得あらせられて、恰も羅漢尊者の化身かと思はるゝばかりでありました。上人が『五百羅漢聖幅護持方軌』をお書きになつて、一一年兩度彼岸、貴坊所居に於て舊規の如く供養すべし。

供養式の具略ば、隨時不定なるべし。七日を期して、稱讚並に道俗の爲に說法

すべし。羅漢應現傳三冊附屬之。兩回の供養雜費金貳拾圓限。

一貴坊命終之附屬は、弟子法類たりとも、護法尊重の志淡薄の衆へは傳持すべからず。若しくは他宗他門也共、其仁物護持すべき器と見得るに於て附屬すべし。宗縛類執を捨離して無所得に住する、固より大聖の公意なるを以てなり。

一世間無常なり。萬一、世上飢饉、其餘天下の大災等有之候節。人々溝壑に顚れ、乞人土地に充滿する樣の時節あるに於ては、僧徒は大悲心を基とし、衣資寺產を盡して、窮迫を救療申すは固よりの志なり。右樣に及ばゝ無遠慮、此聖畫を賣却して米錢に易へ、存者得樂の方便とすべし。價値の高下を論ぜず、救窮に急なるべし、猶此事を施家へ斷るべし。微塵許りの戀着心を懷くこと勿れ、但し造像起塔の容預の喜捨には之を禁ず。是鐵眼禪師經版の財を以て、救飢を行ふ兩回に及ぶに倣ふなり。

聖畫を米錢に易へよ

右三條を以て聖像護持の方軌とす。一切有爲法、如夢幻泡影と說つれば、此とても決定の法あるに非ざれども、一日の護持は一日の護法扶宗也。乃至百年に至る如是。是を以て尊重珍敬供養するに於て、廣くは聖體安寧、國家安泰の御祈りなり、遠くは怨親平等、存亡衆生の回向なり。自行化他、玆より發生し、福德智慧玆より出現す。苟も輕賤玩弄の志あらば、現當過罰、決して空しき事なし、恐るべし。昔し本所羅漢寺の五百羅漢、地震出水の爲に損壞視るに堪えず、愚老往て此が洗浴を行ひ、假屋（四間八間）を造りて遷座し奉りき。當日、住持に言て曰く『師也、聖像を以て塵視泥觀す、果して過罰あらん。請ふ、奉仕尊敬、舊式に還れと。後年、傳聞す。此僧、木より墮ち、石に首を損じて死せりと。蓋し慳貪輕賤、自業自得の報を獲たる者なるべし、前車の誡めあり、幸に覆轍を恐るべし。錄して護持の人を誡む。苟も其人を擇ぶは、所謂其人を憐むが爲なり。

一日の護持は一日の護法なり

明治十六年三月三日附屬の日

三緣山沙門　行誡

と御書きになつてをる。この一篇の方軌は、卽ち行誡上人が羅漢尊者の信仰の結晶から出來た一席の大説敎である。羅漢尊者の功德も、羅漢尊者の精神も總てこの一篇に説き盡されて居る。然もこの寺の寶物たる御尊像も、天下の飢饉、大災の場合には、之れを賣うてその救濟費にせよと仰せらるゝに至つては、實に勿體ないとも有難いとも申やうがない。こゝに羅漢尊者の意義があるのである。木像畫像を唯木像畫像として祀るのみでは、何の意義もない。猶ほ黃檗の鐵眼禪師が、苦辛して集められた一切藏經開版の寄附金を、飢饉の時には惜氣なく投出して救濟に宛てられたことが前後二回にまでも及んだ。眞にこれ活ける一切藏經を造られたのである。この勝跡に學んで、天下のためにならば遠慮無く畫像を賣つて終へとの御敎訓は、實に大見識、大抱負、大信仰であります。これが出來てこそ眞實に羅漢尊者の活用があるのであります。この精神あり、この信仰あつて、この聖像を尊重恭敬すれば、一日の護持は一日の護法扶宗となり、更にこれが聖體安寧、國家安泰の御祈禱となり、遠くは怨親平等、存亡衆生の回向となるぞとの仰せは誠に有難い。斯くてこそ羅漢尊者の信仰は圓滿したと申すべきである。行誡上人にこの敬虔なる信仰があらせられたがために、羅漢寺の尊像を洗浴せられ、住持の無道心を痛斥せられたのである。上人の説法、行爲がそのまゝ羅漢尊者である、上人は自ら得樂の方便として比丘の身を示されたのである。羅漢尊者は元より衆生得樂のために、善巧方便を以て遊戯して居らるゝのであるから、飢饉救濟と云ふやうな社會的活用の場合には自ら喜んで賣られて行かるゝのである。その大慈悲心を有難く合點して、お互の信仰標準とせねばならぬ。猶ほ又この本所羅漢寺には尊い因緣があるが、又改めてお話しすることにする。

羅漢活用の大説法

羅漢信仰の圓滿

五　住所の名號

羅漢尊者は元々生身の菩薩で、世間に現住して佛法を紹隆し給ふのであるから、その肉身が現在すると共に、その平生の住處も亦定つて居るべきである。天下の浮浪人でない限り、その身あると共にその住處も一定して居る。既に『法住記』に、

羅漢尊者の住處

十六羅漢の住處が明記されて居るも夫れがためである。此の如くして羅漢尊者は各各その化緣の地に住し給ふのである。『羅漢講式』の『式文』には、

夫れ二八尊者は、內に菩薩の行を祕し、外、聲聞の形を現じて、寸步の間に法界の化を成じ、一念の程に、施主の田に應ず。三藏、十二の典。五明。四韋の論。

その幽致を悟り、流辯、滯ること無し。

と讚歎し、姑くこれを五段に分けて、無量の德力が讚仰してある。五段とは、一には住處の名號を明し。二には興隆の利益を明し。三には福田の利益を明し。四には

除災の利益を明し。五には世尊の舍利に供ずと云ふのである。而してその第一は住處である。それには『式文』に、

諸方に遊戲す

諸方に遊戲して、聚散、定らず。或は玉樓金閣に住して獨り坐禪入定し、或は海岸仙窟に居して禽獸の爲めに說法し。或は天堂に往いて布薩を行じ。或は人間に遊んで成論を說く。

と書いてある。羅漢尊者は、學校の寄宿舍のやうな所に集つてゐられるのではなくて、山にも海にも、地獄にも、極樂にも居給ふのである。罪深い囚人を感化するために監獄に行つて居らるゝ方もあれば、豪奢を極める成金を導くために東京の眞中にゐる方もあるに違ひない。假令、何れの涯、如何なる所に居給うても、誠心を以て請すれば、何れの所へも來給ふのである。故に『式文』には、

一たび請ずれば一たび來る

若し勸請せんと欲せば、所住の方に向つて燒香散華、禮拜を行ずべし。一び請すれば一び來り。三び請すれば三び來り。百度千度も亦復是の如し。月の水に浮

ぶが如く、必ず至らずと云ふこと無し。

とある。我が信心を受け、我が信心に應じ給ふこと、猶ほ月の水に印るが如く、響の聲に應ずるが如しである。一び請ずれば一び來給ひ、二び請ずれば二び來給ひ、百度千度も亦また是の如く、少しも昧し給ふことはない。羅漢尊者の神通は天上の月、お互が信心は池の水である。水が清く澄んでさへ居れば、清涼たる天上の月は、自らその影を宿すのである。故に頌に、

法性の月と衆生の水

稽首大羅漢。法性清涼月。衆生心水淨。羅漢影現中

とある。水さへ清ければ、何百萬里隔てゝゐても、月はその影を現ずるのである。誠心こめて請ずれば、何千里を隔てゝゐても、直ぐその求めに應じ給ふのである。

祈めて請ずるあれば必ず通ず、求めに應ぜざること無し、億百千萬里も、壯士の擘を屈伸するが如し。

と『祭文』にもある。女の念力は岩をも透すと云ふからには、お互の信心が、羅漢尊者に通じない道理はない。請ずることあれば必ず通ず、求めに應ぜざること無しで、此方がお願ひすれば、如何なることもお聽き下さらぬことはない。敲けば門は開かれる、求むれば必ず與へられ、祈れば必ず靈驗はある。實に有難いことである。而も血氣盛りの男が、自分の擘を屈げたり伸ばしたりする如く、實に自由であつて、何千萬里隔てゝゐやうとも、更に邪魔にはならぬ。と云ふのは外ではない。

敲けば門は開かれる

羅漢尊者を決して遠い所に求めてはならぬと云ふことである。羅漢尊者は支那の天台山の石橋に應現せられ、或は耆闍崛山卽ち靈鷲山や雁宕山に影向されたと云ふが、その天台山を、只遙な所にばかり尋ねてゐてはならぬ。耆闍崛山と云ひ、雁宕山と云ふも、亦みなお互の脚下にあるのである。脚下の用心をせねばならぬ。大智禪師が水月庵の偈にも、

毘盧海上起波瀾。江月松風永夜寒。箇箇面前觀自在。人人一座補陀山。

と詠ぜられた。觀音樣の補陀山ばかりではない。これを羅漢尊者にすれば、箇々面

箇箇面前の阿羅漢

耶馬溪の羅漢寺

羅漢尊者の因縁

前の阿羅漢。人々一座の耆闍崛山。又は天台山でも雁宕山でも好い。お互が法性海中に活波瀾を起し、江月松風、永夜寒しと云ふやうに、動靜一如の大活動あつて、世智辛いこの世の中に、悠々たる生涯を送ることが出來たならば、慾垢煩惱の凝結なる此の身このまゝ活ける羅漢であり、紅塵擾々のこの世の中がこのまゝ羅漢尊者遊戯の耆闍崛山である。お互は決して羅漢尊者を遠きに求めず、自ら活ける羅漢たるの覺悟を持ち、我が身の坐する所、我が足の留る所、悉く是れ羅漢尊者の住所と知らねばならぬ。

日本でも羅漢尊者の靈蹟は所々方々に隨分ありますが、その中でも先づ指を屈しなければならぬのは、九州耶馬溪の羅漢寺であります。耶馬溪は彼の賴山陽が『耶馬溪山天下無』と謳ひ又は『之れを海内第一と謂ふも或は誣ひざるなり』と云つてから、大に天下に紹介せられたが、その山水の絶勝なるは古くから喧傳せらて居るのみならず、羅漢寺の緣起に就いては猶ほ古い因緣があつて、この地が自ら羅漢尊

耶馬溪の勝概

者應現の靈境であつた。殊に日本禪僧中第一の詩人として、賴山陽が『衣中廿八顆明珠。風雅終然墮筍蔬。出類故當推絶海。指揮如意掣鯨魚』と推奬した絶海中津禪師が、羅漢寺の舍利塔の銘を書かれた中にも『羅漢寺は鎭西の勝地にして、台雁の秀を鍾む』と云つてある。台雁は即ち天台山と雁宕山である。羅漢尊者の靈境として支那の二名所たる、天台山と雁宕山の秀靈を一所に鍾めたと云ふのである。蓋し世界第一の秀靈の境致と云ふことになる。耶馬溪にして若し羅漢寺なかりせば、恰も龍の水を得ざるが如く、羅漢寺にして若し耶馬溪に在らざるならば、猶ほ虎が山に靠らざるの恨があらふ。羅漢寺と耶馬溪とは、自ら相離るべからざる因緣あつて、この天下絶勝の山水に、信仰と歴史との一大光彩を添へて居るのである。

抑も耶馬溪は、山國川の上流一帶の溪谷十數里に亙つて居る。仰げば巍峨たる英彦山の奇峰、天際に聳えて常に白雲を生じ、雲は騰つて雨となり、雨は流れて溪となる所、鐘山の山脈と、縈回並馳して自然の奇觀を呈し、峰頭突兀、山、水を蹙め、

水、石に迫り、奇勝名狀すべからざる風光である。路を中津より取り樋田に近き鮎返より漸く風光の美を現はし、佛坂より青生の洞門に至れば、路は筍の如き攢峰の山腹を穿ち、川に沿うて通じてをる。渡船を渡つて對岸より望めば、苔蒸したる絶壁の下、亂松逆に倒れ、危巖突兀たる間、人馬、洞門を出入する光景、宛として畫の如く、左すれば二十町にして羅漢寺に到る寺には飛來峰、天人橋等を初めとして二十四景あり、指月庵に上れば溪勝悉指顧の間に集り、忽ち凡骨を洗清し、心神、恍として仙ならむとするのである。眞に是れ天台、雁宕の勝を集めたる靈地である。

羅漢寺の緣起

恭しく羅漢寺の緣起を按ずるに、今より凡そ千三百年前、孝德天皇の大化元年に、西國觀音靈場で有名な法道上人が初めて此の山を開かれた。それより更に三百七十餘年を經て、後朱雀天皇の長曆年間に、山城の聖僧小野仁海がこの靈窟に入つて修禪した。それより又三百餘年を經て、後醍醐天皇の曆應年間に建仁寺開山榮西禪師の法孫に圓龕照覺禪師と云ふがあり、諸方行脚の因みこゝに來り、開闢の尊き因緣を思ひ、峰巒の重疊として巖窟の嵯峨たる自然の靈境を見、印度佛蹟の一たる耆闍崛山も斯くやありなむと殊勝の想をなし、この所こそ誠に十六羅漢、五百羅漢等の石像をも安置して、末代衆生に福田除災の利益を蒙らしむべき道場なりと、未だ行通ふ草の路もなく、起臥す茅の庵もなき頃に、自ら深くこの山中に入り大誓願を發し、先づ假りに自ら十六羅漢の畫像を描き、これを窟中に掛けて耆闍崛羅漢精舍として、暗に尊者の應現を祈つてをられた。禪師は自ら此地卽ち是れ耆闍崛山なりと信じて居られたのである。

異僧建順の發願

不思議なる哉。尊者の應現はあつた。それより僅か十數年にして延文四年に至り逆流建順と云ふ一人の異僧が、何處からか忽焉として照覺禪師の下へ來た。建順は第一より第四までの洞窟を見て、頻にその靈勝幽邃を讃歎し、願くは石羅漢の尊像を彫刻してこゝに安置せんと乞うた。照覺禪師は是れ我が素願なりとて非常に喜ば

れた。こゝに二人は力を合せ、十方の有志を得、手ら尊像を彫刻せられた。妙相端嚴、その長三尺内外、坐像あり立像あり、その總數凡て三千七百七十餘體と稱せられて居る。儀貌魁梧、凛乎として活けるが如く、靈祥荐りに顯はれた。軈て翌年の十一月、その開眼供養が盛大に行はれた翌日、建順は俄に暇を乞ひ『吾が願已に畢りたれば速に往かむ』とて『出生入死。一往一來。朝遊東土。暮還天台。』の一偈を留めて山を下つた。あゝ建順は、支那の天台山へ去つたのである。『臥雲日件錄』にこの事を書いて『昔、一僧あり之れを刻む。蓋し化人なり。この時に在て常人と雖も皆能く之れを刻畫す。その石滑なること泥の如し、亦化人の力なり』とある。即ち異僧建順を以て羅漢尊者の應現としたのである。この應現あつて、初めて眞の羅漢寺が出來たのである。實に尊い因緣である。

照覺禪師の常在法身

その後凡そ二十年を經て永和二年に、佛舍利感得の靈驗があつた。照覺禪師は感泣頂戴して、寶塔を造つてそれを奉安せんとして未だ果さず、空しく遷化せられた。

將軍義滿の歸依

實に至德元年九月であつた。その臨終に當り弟子祖訣、省卓の二人を呼び、告げて曰く『我れ化緣已に盡きぬ。汝等、宜しく我に代り、如來の大敎を弘通して盡未來際に法燈を傳持せよ。我れ亦永く當山の境を離れずして守護せむ』と、乃ち雞足山と名くる所の巖石を穿ち、その中に入定せられた。然し『諸〳〵の弟子、展轉して之れを行ぜば、如來の法身、常に在して滅せざるなり』である。照覺禪師の遺誡を守つて法燈を傳持する時は、禪師の法身は實に常在にして不滅である。禪師は滅後五百餘年の今日、猶ほ儼然として羅漢寺に說法し給ふのである。思ふに禪師が羅漢寺開闢のために前後四十餘年間、此の山中に留錫せられたるは、或は亦、羅漢尊者の應現であらう。否、禪師が靈山の開拓、現身の說法、悉く羅漢尊者の活動ならぬはない。

弟子の省卓和尙は、開山照覺禪師の滅後、遙々京都に上り、時の將軍足利三代義滿公に面謁し、羅漢石像の由來並に佛舍利の感得等を以て上聞に達したるに、公は

深く事の靈異なるに感じ、自ら書して『耆闍崛山』『羅漢寺』の二大額を賜うた。これより此處を羅漢寺と稱し、耆闍崛山と呼ぶに至つた。斯くて羅漢尊者應現の道場として信仰せらるゝに至つたのである。これ眞に天台、雁宕二山の秀靈を集めた眞境致である。この羅漢寺卽ち天台山であり、雁宕山である。決して印度、支那、日本の差別はないのである。將軍義滿公が自ら耆闍崛山と號し、羅漢寺と稱したのは大に意義あることである。

耆闍崛山の譯義

抑も耆闍崛山とは印度語で、その山容が鷲に似てゐるので靈鷲山と譯して居る。それを略して靈山とも云つてをる。釋尊が行化五十年の中、多くはこの山にゐて說法し給うたのであるから、靈山會上とか靈山の一會とか云ふ語がある。法華經の如來壽品偈には、

『一心に佛を見たてまつらんと欲して、自ら身命を惜まず、時に我れ及び衆僧、俱に靈鷲山に出づ。我れ時に衆生に語らん。常に此に在て滅せず、方便力を以て

の故に、滅不滅あることを現す。餘國に衆生の恭敬、信樂する者有れば、我れ復彼の中に於て、爲に無上の法を說く、汝等、此を聞かず、但だ我れ滅度すと謂へり。我れ諸〳〵の衆生を見れば、苦海に沒在せり。故に爲に身を現ぜず、其をして渴仰を生ぜしむ。其の心、戀慕するに因つて乃ち出で、爲に說法す。神通の力、是の如し、阿僧祇劫に於て、常に靈鷲山及び餘處の住處に在り。

と說かせられてある。お釋迦樣は、今猶ほ儼然として靈鷲山に在て、常に說法し給ふのみならず、阿僧祇劫卽ち幾百千萬年の後までも、常に靈鷲山その他の住處に居給ふのである。釋尊既に在し給ふとすれば、その弟子たる羅漢尊者の法身も亦不滅にして、世間に現住し給ふも不思議はない。靈鷲山は決して印度の摩訶陀國にのみあるのではない。釋尊の法身の在る處卽ちこれ靈鷲山である。支那にも朝鮮にも、米國にも英國にも、獨逸にも佛蘭西にも、何處でもある。耶馬溪を耆闍崛山と稱した時には、耶馬溪卽ち靈鷲山なることを示したのである。耶馬溪の外に靈鷲山を求

める必要はない。羅漢寺の外に靈鷲山を尋ぬるに及ばぬ。この處卽ち羅漢尊者の道場なり、この處卽ち羅漢尊者の住處なることを敎へたのである。羅漢尊者の住處は決して之れを遠方に尋ぬるに及ばぬ、人々脚下悉く是れ耆闍崛山である。人々脚下悉く是れ羅漢寺である、直心是れ道場である。直心ある所、耆闍崛山あり、羅漢寺もある。直心卽ち是れ羅漢尊者の道場である。この道場の建立こそ最も大切な一大事である。この道理を早く悟れば、羅漢寺の緣起に現はれた一々が、皆是れ羅漢尊者の應現なることが解る。卽ち盡十方世界、悉く是れ羅漢尊者の住處である。

直心道場の建立

十方普遍の應現

天上一輪の明月は、玉の宮居も照せば、賤が伏屋をも亦同じく照す。月には尊卑貴賤の隔てはない、實こ途路一平等である。戰爭に荒れて風猶ほ血腥き佛蘭西や獨逸の野山も照せば、雪深き西伯利亞の野も照し、花咲き匂ふ春の都をも亦同じやうに照す。實に十方普遍である。羅漢尊者は淸涼たる一輪の月である、貧しいの富めるの、尊いの卑しい、男女長幼などの隔ては元よりない。唯求むる人の心の水に依ってその影を宿し給ふのである。法然上人が、

月影のいたらぬ里はなけれども
　ながむる人の心にぞすむ

と詠まれたのは此の道理である。お互がこゝに信心發起して、至心に頂禮恭敬せねばならぬことである。

六　興隆の利益

羅漢尊者の御德を讃歎する第二は、卽ち興隆の利益で、世間に現住して佛法を興隆し給ふの御利益であつて、これこそ羅漢尊者が所有姿を以て、所有處に應現して常に限りなき大利益を與へ給ふ目的を示すものであります。

應現の目的

その興隆の利益に就いても亦、羅漢寺のお話がしたい。羅漢寺が昭覺禪師開闢の後、凡そ二百年ほどを經て、寺は何時しか大に荒廢した。この時に國守細川忠興公が信心奮起せられ、自ら大檀那となつて再建の大事業を成就せられ、頓に面目を一新した。かやうに信心奮起して三寶興隆を計られた忠興公こそは、正に有髮の羅漢尊者と申すべきものである。その後、慶長年間に長門大寧寺の鐵村禪師がこゝに住持せられ、更に寺門を中興せらるゝに及んで、今までは臨濟宗であつたのを革めて曹洞宗とせられた。これより大に祖風を宣揚して今日に至つて居る。明治維新、

羅漢寺の沿革

廢佛の難にも遇はず、天災地變にも遭はず、法燈恙無く今日に傳へられたことは、全く羅漢尊者が正法興隆の御利益あることゝ深く信ずるのである。それに就いても更に傳ふべき一因緣がある。

禪海の發心懺悔

時は享保九年、年の頃四十恰好の一人の行者が羅漢寺へ來た。その名を禪海と呼んだ。羅漢寺は名立たる天下の名勝であるが、何を云うにも危巖絕壁、殆んど路が通じてゐない。細い棧道や危い斷橋、さては鐵鎖に縋つて踰えるやうな所もあるので、人馬の落ちて死する者が屢々であつた。それがために折角の靈地も、老幼婦女の參詣する便りもなく、僅かに寺の坊さんや修行者の往來するに過ぎず、誠に結緣のために惜むべきであつた。禪海行者はこゝに大願心を發した。我れ發心して今は出家の身となつて居るも、思へば過去の罪障のほども恐ろしく、せめてもの懺悔に、願はくはこの新道を拓き、一年に十人落ちて死すれば、十年には百人、百年には千人、早く衆人往來の便宜を計り、その人命を助けて、自らが過ぎし半生に人の命を

新道開鑿の大業

取つた罪を滅ぼし、且は佛法興隆の利益、衆生福田の利益が計りたいと。乃ち羅漢尊者の靈前に祈願を籠め、自分の畢生を捧げて新道の開鑿を誓つたのである。

願ふは佛の加被力、賴むは我が腕の力。開く路は鐵よりも堅い巖又巖。仰げは城よりも高く、俯せば危き溪底、若し一手誤れば身を捨てねばならぬ。禪海行者は滿身の力を籠めて鐵槌を振上げた。コツコツ、コツコツと堅い巖を掘つた。朝から晩、晩から朝と、星を戴いて働き、月を負んで休み、我が力の盡きんまで働いた。一日掘つて一尺は穿かぬ。一月二月費つて猶ほ一間の路も出來ぬ。鑿つて鑿つて鑿り拔いた。一年二年三年……五年と經つた。初めは氣狂ひ扱ひしてゐた村の人等も、禪海が不退轉の努力に感じて、互に相來つて村のためにと手傳つて働くやうになつた。禪海行者は更に力を得て、猶ほコツコツと鑿つてをる。その精も根も殆んど盡き果てる位になつても、まだ其の腕を休めなかつた。羅漢尊者が金錫の響の如く、毎日毎日朝から晩、晩から朝と、槌の音、岩の音が耶馬溪に響いた。土地の人達も

二十餘年の丹誠

行者の熱心と丹誠に感じて、各々力を盡して助けた。禪海行者は身の苦勞も、年の疲れも忘れて、唯一途に新道の出來るのを樂しんで、浮世のことを忘れ果て、堅忍持久、一心不亂に働いて早や二十餘年は夢の間に過ぎて、思はぬ疲れに、何時の間にか髮は白くなつた。久しい間、岩窟の中の仕事に、脚や腰も痛んで起居さへ自由を失つた。眼も痛めた。それでも死ぬまではと働いてゐた。あゝその恐ろしい一心の力は通つて、早や二百何十間の新道は出來た。モウ二三年だ。それでスッカリ出來上ると、禪海行者は行手を眺めて喜んだ。

或る日、年の頃四十恰好の旅士が、羅漢寺へ來た。而して岩を鑿つて居る禪海行者の所へ來た。件の若士は、餘念なく岩を鑿つてゐる禪海行者に逢ひたいと言つた。窟から出て來た禪海行者を見ると、脚も立たず、眼も見えず、思束なき病人である。これはと許り張り詰めた心も緩んで、復讐の心も頓に挫けた。漸くのことに、聲を掛けて『貴方は福原一太郎ではないか』と云つた。禪海行者は愕然として

孝子の復讐

驚いた。何を隱さう、禪海とは世を捨てた行者の名、本名は紛れもなき福原一太郎である。殆んど二十年來呼ばれたことの無い我が名を、この九州の涯に呼ぶ者あらうとは夢にも思はなかつた。禪海行者も今はこの娑婆に未練もない、何を恐るゝ心もないので、『さて左樣に呼ばるゝ御邊は』と問へば、『拙者こそは、今より二十年前、江戸に於て貴殿のために討たれたる中川四郎兵衞が忘れ形見實之助で御座る、親の仇、イザ尋常に、勝負致されよ』と申入れた。『おゝ思ひ樣なき中川殿の御子息、ここで御目にかゝるは我が罪滅ぼし、喜んでこの皺首を指上げ申す。さりながら茲に一つの願ひあり、何卒お聞屆け下されよ。そは餘の儀で無し。某こそ、今は一念發起、罪障消滅のために、この耶馬溪羅漢寺に入り、新道開鑿を思ひ立ちしより已に二十餘年、その大半は成就したれども、殘るはこゝ二三分の所。これを成し遂げずして逝くは如何にも心殘りなり、何卒、三年の猶豫賜りたし、然ればこの大業も成就して、我が所願も滿足なれば、此の世に思ひ殘すこと更になし、潔く貴殿が至孝の刃に討たるべし。』と。誠心表はれての言葉に實之助も深く感じ、且は村の人々が乞ふがまゝに暫しの猶豫を與へた。然し又幾年來、尋ね廻つた不倶戴天のこの仇、現在眼の前に見つゝ討ち果すことの出來ぬは殘念と、或る夜窃に討たんとしたが、禪海行者が夜の目も寢ず働き居るに感じ、『自分の一生をこの新道開鑿に盡くされたるは卽ち菩薩行、況してこの事業成就のために命を乞はるゝこそ最も至極、若しもこの人を討つならば、菩薩を討つも同前にて其罪却て恐ろし、父の仇と思へば憎けれども、討ち討たるゝは先の緣、討たれし父は宿世の業、その業を滅せずして又討てば、遂にこの罪の逃るゝ時こそなし。悟つて見れば互に兄弟、況してその大業を成さるゝ身の上、世のために捨てられたる其の身こそ尊し。今は某も迷ひの夢は覺め果てたり、父の仇は宿世の業と打忘れ、貴殿のこの大業の御助け致さん』と、聞くより禪海行者は夢かとばかり打驚き且つ喜び、昨日の敵は今日の友と、二人は力を合せ身を合せ、孜々として一心に働いた。早や三年にして豫定の工事は目出

昨日の敵は今日の友

度成就した。實にこれ寶曆三年にして、初め禪海行者が發起より三十年である。行者が丹誠は恐るべきものであるが、その發心、その至誠のために、不倶戴天の仇をも感ぜしめ、却つて隨喜の一人となつたのは、全く禪海行者が、羅漢尊者の寶前に祈誓した信仰から湧いたものである。この道一たび成つてより羅漢寺は、天下の靈地として衆人の往來漸く繁く、佛法興隆の利益を得たのである。のみならず中川實之助の助をして、飜然として敵討の心を改めしめたのは實に尊い因緣で、これがために二人の活ける羅漢尊者を助て、いよ〳〵佛法興隆の事業を成就せしめたのである。

耶馬溪の活羅漢

禪海行者のこの事業は、誠に菩薩四攝法の一たる布施の願行である。中川實之助が小さき私心を捨てゝ、この人を助けたのは正に隨喜の菩薩である。この二人こそ誠に羅漢尊者の應現であつて、逆緣を以て佛法を興隆せられたものである。若し禪海行者が出なかつたならば、耶馬溪の路は或は開かるゝことなく、多くの人の命を谷底に流し、從つてこの山水は遂に天下に紹介せらるゝことがなかつたかも知れぬ。

正法の興隆

若し耶馬溪の紹介者が賴山陽であるとすれば、その山陽をして此の山中に自由に遊ばしめたのは、實に禪海行者である。禪海行者こそ耶馬溪の先驅と云ふべきである。禪海行者は實に耶馬溪の活羅漢である。

『式文』には、弗沙王が印度で佛法を破滅されたが、王の死後に羅漢尊者が再び、法燈を輝かされたことを說いて、

若し然らざれば、我れ等冥きより冥きに入り、三寶の形を見ず。苦より苦に遇うて安樂の名を聞かず。

とある。お互が今日、値ひ難き佛法に値うて、最勝の善身を全ふし得るのは、偏に羅漢尊者が正法護持のお蔭であるから、共に歡喜讚歎して紹隆の廣恩を報じなければならぬ。

松本藩の廢佛

明治維新の折、各地方で廢佛毀釋が大分行はれたが、中にも信州松本藩の如きは激烈な方であつた。先づ寺社奉行が領下の寺院を召んで廢佛を申渡し、一同に還俗

歸農を申付けた。然るに松本領なる大町の靈松寺は、信州隨一の名刹であり、時の住持は、足立達淳老師であつた。老師は頑として藩命に應ぜず、斷じて歸俗をなさらぬ。又寺社奉行より特に出張して勸告するやら、强迫するやら、所有手段を盡したが、老師は頑として肯かれぬ、又攻める。『そんな頑固なことを云つてゐても、今に日本中の寺が毀れて終ふぞ、それでも歸俗なさらぬか』と言へば、『日本に寺が無くなれば支那へ行くのみである、斷じて歸俗はせぬ』と頑張つて居られた。藩公の香華所たる松本の全久院抔も既に藩命に應じた程であつたが、靈松寺の方丈が、儼然として動かれなかつたのは、ドレ程地方人の心を强くしたか知れない。然しこの迫害、壓制、ます〳〵甚しく、遂に危害の身に及ばぬことを怖れて、弟子の沖津元機和尙と共に、或る夜、窃に大町を逃れて江戸へ出られ、之を宗衙に訴へ且つ政府に夫れ〳〵の手續を遂げられたので、全久院は毀却せられたが、靈松寺を始め歸農に應ぜざりし寺院は總て無事なることを得た。而して明治十五六年の頃、達

足立達淳師の藤法心

戰爭と羅漢尊者の出現

淳老師のお心添や、沖津和尙の辛勞に依つて全久院も再興せられ、他の寺々も各々復興して、今は稍昔に返つて佛法繁昌の土地となつた。達淳老師の働きは、全く羅漢尊者の應現であります。その他奕堂禪師や棐仙禪師等にも、維新當時に於て、佛法護持のお働きは隨分あつた。それ等のお蔭で、再び三寶の興隆を見るに至つたのであるが、齊しくこれ羅漢尊者が佛法護持のお働きである。

近頃のやうに人心が頗る荒んで、信念がまし〳〵衰へ、佛とも法とも知らぬ者が多くなつた時、羅漢尊者は必ず出現せらるゝのである。殊に五年間も打續いた世界の大戰爭、人は生きながら修羅道に墮ちて居る慘憺しさ。博愛を說くキリスト敎の精神は疾くに亡びて終つて居る。宗敎の權威も無くなつた。然しこのやうな樣子は、三千年の昔、釋尊がちやんと御經にお說きになつてゐて、かゝる折柄、羅漢尊者は正法護持のために御出現されるのである。『法住記』には、

十六大阿羅漢、正法を護持し、有情を饒益して、この南贍部洲に至る。人壽、極

短にして十歳に至る。刀兵劫起つて互に相誅戮す。佛法その時、當に暫らく滅沒すべし　刀兵劫の後、人壽漸く增して百歳位に至る。この洲の人等前の刀兵劫等の苦惱を厭ひ、復、修善を樂しむ時、この十六大阿羅漢、諸〳〵の眷屬と復、人中に來り、無上正法を稱揚顯設し、無量衆を度し、それをして出家せしむ。諸〳〵の有情の爲めに饒益の事を作すこと是の如し。乃至この洲の人壽六萬歳の時、無上正法、世間に流行し、熾然として息む無し。後、人壽七萬歳の時に至つて、無上正法永く滅沒する時、この十六大阿羅漢、諸〳〵の眷屬と此の洲地に俱に來り集會し、神通力を以て諸〳〵の七寶を用ひ、窣堵波を造り、嚴麗高廣、釋迦牟尼如來應正等覺、所有の遺身馱都、皆その内に集まる。その時に十六大阿羅漢、諸〳〵の眷屬と窣堵婆を繞り、諸〳〵の香華を以て、持用供養し、恭敬讚歎し、繞ること百十匝し、瞻仰、禮し已つて、俱に虛空に昇り、窣堵波に向つて此の如きの言を作す。敬禮し奉る、世尊、釋迦牟尼如來、應正等覺。我れ敎勅を受けて正法を護持し、

正法滅沒の時

及び天人と諸〳〵の饒益を作す。云々

と說いてある。佛法將に滅せんとする時には、羅漢尊者必ず出で、紹隆し給ふのである。今や世界の大戰亂は漸く熄んで、世界に平和の光曙が輝いた。これから世界思潮に一大變動が生じて來る。この時こそ羅漢尊者が諸〳〵の眷屬と共に、無上正法を稱揚し顯設し給ふ時である。實に是れ我が佛敎徒活動の秋である。この時に羅漢尊者が應現し給はねば、又應現し給ふ時がない。このやうにして我が佛法は、ますます興隆するのである。

行誡上人と本所羅漢寺

行誡上人が本所の羅漢寺の荒廢を嘆かれて、自ら力を盡して再興せられたのは、全く佛法興隆の利益である。上人は『於知葉集』の中に

未の年の秋の頃、大般若經結願の供養を、本所の羅漢寺にて行ひ侍りき。此寺は、憲廟、有廟の御志にて造立なりしを、近き頃の地震風災などにて、堂塔みな破れ、尊像ども雨露のふせぎだになくなりぬ。見侍るにもいと悲しくて、やがて其

寺の住持にはかりて、再興の大願おこし侍りき、增上寺冠吟大僧正も、よき事發心せしをつとめてなどのたまひけるに、ます〳〵志をはげまし侍るを、何となきさはりども出て來て、其事はやみにけり、御假屋一所たて參らせて、もとの堂より遷座申したりしかば、今も露のふせぎは出來しかど、今のまゝにしてすたりもゆきなば、果は又塵埃にまじりて行へなしならせ給はむなど、思ひつゞくれどせむなし。其頃、幾度かゆき通ひ侍りしによみ侍りける

おきかへてまた夕月にみがゝなむ
あしたくだけし露のしら玉

と書かせられてあるが、これを讀めば坐に涙を催すのである。上人が常に佛法紹隆のために身を惜み給はなかつたのみならず、別して羅漢信仰の深かつたのは、全く羅漢尊者の應現かと仰がれるのである。此の如く佛法興隆の利益は、お互が眼の前に常に受けて居るのである。これ卽ち『諸方に遊戯して聚散、安からず』と『式文』にある實際の樣子であつて、到る處に說法利益し給ひつゝあるのである。つら〳〵昔からの佛法變遷の狀態を考へて見ますと、實に不思議なほど有難く思はれるのであります。これ確に羅漢尊者が、佛法興隆の御利益であります。お互にその有難さを思つたならば、深くこゝに報恩の行持を勤めねばなりませぬ。

諸方遊戯の實際

佛敎道德の根本は、唯この報恩の二字にあるのであります。羅漢尊者は、元これ智慧、道德の圓滿したお方でありますから、衆生化益の御働きが、總て圓滿せる智慧と道德との現れたもののあらぬは無い。卽ちお釋迦樣の御遺囑に依つて、遺法を護持なさると云ふも、亦これ佛恩報謝の行持であります。故にお互は、羅漢尊者の尊い御德を偲ぶと共に、その報恩の行持を心掛けねばなりませぬ。これが信仰の第一義であります。この報恩的信仰があつて、初めて社會的に活きた働きが出來るのであります。

報恩の行持

七　福田の利益

兆殿司の五百羅漢

彼の有名な畫僧兆殿司が、丹誠を籠めて東福寺の大涅槃像を描き上げてから、更に大誓願を發して、五百羅漢の尊像を描いて東福寺に納めたいと思つた。が、元より一介の修行僧、殊に何かと不便な昔のことであるから、繪絹や繪具すらも思ふに任せぬので、人知れず煩悶して居ると、この事が圖らずも時の將軍足利義持公の上聞に達し、將軍が『然らば絹地を寄附して遣らう』と云ふことになつたので、兆殿司は非常に力を得て喜んだ、所が之れと思ふ善い粉本がない。それを獲るためにはドウしても明に渡らなければならぬ。その頃のことであるから、明に渡ると云ふことは實に難儀なことである。が、ドウかして善い粉本を得たいと、思案に餘つて遂に神佛の力に訴へた。

東福寺の直ぐ隣は伏見稲荷で、殊に靈驗が著しかつた。伏見稲荷の本地は愛染明王である。兆殿司はその寶前に參籠して、好き方便もがなと祈願した。或る日の朝、祈願を終へて伏見街道を東福寺の門前まで來ると、白髪、雪の如き一人の老翁に逢つた。翁は兆殿司を呼び留めて、『汝の求むる所は是なるべし』とて、袂から一軸の卷物を出して授けた。兆殿司は受けて押頂き、恭しく披き見ると、思ひきや五百羅漢尊像の粉本である。あな嬉しや、有難やと御禮を述べんとすれば、早や翁の姿は消えて無かつた　兆殿司は、これぞ稲荷明神の靈驗と感謝し、それを粉本にして精神を凝らして描きかけた。何を云ふにも意外の大作で、忽ち又繪具の不足を感じたので殆んど途方に暮れた。また稲荷明神に祈願を籠めた。或る日、東福寺で有名な通天橋を降りて、下の谷に落ちてゐる色々な美麗な石を見た。その石を探しつゝだん〳〵谷奥へ溯つて、更に色の好い石を拾つたので、これは珍らしいと、試みに磨つて見ると、思ひ掛けない實に好い繪具であつた。あゝ尊ふとや、これこそ神の與へと喜んで自由に使つた。後年、この谷を繪具谷と呼ぶやうになつた。

伏見稲荷に祈願

繪具谷の靈驗

それから一心不亂に描いてゐると、或る日のこと、故郷の淡路島から便があつて、『母が病氣である、取る年波で最早永くはあるまい。この世の別れに一目逢ひたい』とのことであつたので、兆殿司も驚いたが、若し恩愛の絆に羈されて、故郷へ歸るやうでは、迚もこの五百羅漢尊像を描く大願を成就することが出來ぬ。況して親子の緣も切つて剃髮出家した身の上、今はお目にかゝることも出來ぬ。なれども、因緣あつて親子と名乘つた二人の間、せめてもの心慰めにと、自分の像を水鏡に寫して描き、それを使者に持たせて歸し、遂に母の臨終にも逢はないで、一心に五百羅漢を描き終へた。敬虔なる信仰誓願のために、血の涙を絞つて恩愛を斷つたのである。これが今日、東福寺の寶物として國寶にも編入されて居る、兆殿司が敬虔にして純潔なる信仰は、遂にこの大業を成就せしめたのである。

兆殿司が伏見稻荷に祈願してその靈驗を蒙つたのは、蓋しこれ羅漢尊者の應現であつて、これが卽ち福田の利益である。田に種を蒔けば、必ず秋の收穫がある如く

信仰の種を羅漢尊者の田に蒔けば、必ず應驗の收穫があるのである。尊者の靈前に祈れば、必ずその利益が得らるゝのである。繪絹を求めて繪絹を得、粉本を求めて粉本を得、繪具を求めて繪具を與へ給ふは、悉く是れ福田の利益である。『式文』には、

夫れ一切の羅漢、皆是れ衆生の大福田なり。損益の報、來世を待たず、賞罰の驗眼前に在り。惱亂、殃を招く。土を雨らして都城を埋むも、供養すれば、福を得。寶を雨らして王宮に滿つ。形像を見る者は、永く貧苦を離れ。名字を稱する輩は、早く擁護に預る。

とある。羅漢尊者の木像畫像を拜む者すらも、永く貧苦を離れて福樂を受るのである。南無大阿羅漢と頂禮したならば、常にその守護を得て、身體健全、家內安全の德報を得ること勿論である。『法住記』には、

此の世界の若き一切の國王、輔相大臣、長者居士、若くは男、若くは女、般淨心

を發して、四方僧の爲めは大施會を設け、或は五年無遮施會を設け、或は慶寺慶像、慶經旛等、大會を施設し、或は清僧を延き、所住の處に至り、大福會を設け、或は寺中經行處等に詣し、上妙の諸〳〵の坐臥具を安布し、衣藥飲食を僧衆に奉施す。時に此の十六大阿羅漢及び諸〳〵の眷屬、その所應に隨つて分散して往き赴き種々の形を現じ、聖儀を蔽隱し、常凡の衆と同うし、密に供具を受け、諸〳〵の施主をして勝果報を得せしむ。

常凡の衆と同じ給ふ

と說いてある。羅漢尊者は常に尊いその姿を隱して、お互の身と同じ姿を現はして密かにその供養を受けらるゝのであるから、凡夫の眼には夫れが見えぬのである。が、その利益を與へ給ふことは、響の聲に應ずるが如きである。常に一切衆生の大福田となつて、この活社會に活動し給ふのである。

水の無い所に水を求むれば、羅漢尊者は水を與へ給ひ、路無き處に路を求むれば、羅漢尊者は路を與へ給ふのである。奥州白河領の五左衞門が、身命を捨てゝ井戸を

井戸掘五左衞門

掘り村のために初めて良水を得、領主白河樂翁公をして讃歎せしめたは有名な話であるが、これ即ち羅漢尊者が井戸掘五左衞門の身を借りて水を與へ給ふたのである。

石州の方へ行くと『芋代官』と稱へ、井戸平左衞門の碑が到る處に建つて居るが、これは石州大森の代官であつたが、地方凶歲の用意にと、薩摩から芋苗を取寄せて植ゑさせた。それは彼の青木昆陽先生よりも早いのである。然るに打續く連年の凶歲で百姓が苦るしんでゐた時、幕府の命を待たず藏米を出して一時の急を救つたが。身は掟を破つた罪を覺悟し遂に切腹した。卽ち身を犧牲にして領下の民を助けたのである。その後、薩摩芋はだん〳〵蕃殖して、それから後はその地方では饑饉の苦を屢々免れたので、いよ〳〵井戸代官を德として、到る處に碑を建てゝ報恩供養するに至つたのである。この時には羅漢尊者が芋代官となつて、地方幾千の人命を助けられたのである。

お互が誠心こめて祈る時には、羅漢尊者は有らゆる姿を以て世に出でらるゝので

種々身處々現

南朝の皇風競はず、國步艱難のその時は、楠父子となつて忠義の道を盡くし、世華奢風流に遊んで武士道の怠廢した時には。大石良雄等赤穗四十七士となつて世に出でゝ、武士道の模範を示し、百姓が塗炭の苦るしみを受けて居る時には、義民木内宗吾となつて之れを助けて居る。近くは乃木大將が武人の典型として一代の渴仰を集めて居らるゝのも、亦これ羅漢尊者が福田利益の働きならぬはない。羅漢尊者は或は大工の中に、或は畫工の中に、或は商人に、或は學校に、或は工場に、或は會社に、或は兵士となつて軍隊に、或は戰場に、有らゆる所に有らゆる姿を現じて常に衆生のために利益を與へ給ふのである。日光や箱根の紅葉狩に出かけた人々のためには、或は籠舁となつて福田の利益を與へ給ひ、或は船頭となつて渡船を守られ、或は車夫となつて足の弱い人を助けてゐらるゝかも知れぬ。お互が羅漢尊者を敬禮するは、『式文』にもあるが如し、

敬禮の精神

有漏の福報は本意にあらずと雖も、事善資糧、又是れ至要なり。

承陽大師感應の教訓

で、決して物質的の果報を得ようと思ふのではない。が、至心の感應道交した時には、不思議の靈驗あることを信ぜねばならぬ。これを信ぜずして、自分の信仰を他所にし、却て福田利益の靈驗を笑ふやうなことあつてはならぬ、それに就いても承陽大師が、

世人、多く善事を作す時は、人に知られんと思ひ。惡事を作す時は、人に知られじと思ふに依つて、此の心冥衆の心に合はざるに依て、所作の善事には感應なく、密に爲す所の惡事には罰あるなり。是に仍て還つて自ら謂らく、善事には驗しなし、佛法の利益すくなしと思へるなり。是れ卽ち邪見なり、最も改むべし。人も知らざる時に密に善事をなし、惡事を錯りて、後には發露して、とがを悔ゆ。かくの如くすれば、便ち密々になす處の善事には感應あり、露るゝ惡事は懺悔せられて罪を滅ずる故に、自然に現益もある當果をも亦知るべし。

と御示しになつたが、實に有難い御言葉である。この御言葉を能く〳〵合點して、

風外禪師の十六羅漢

福田の利益あることを信じ、その利益を蒙らねばならぬ。

信州篠ノ井在の玄峰院に、香積寺風外本高禪師の御描きになつた十六羅漢の三幅對がある。風外禪師の筆は誠に洒脫で、氣品が頗る高尙であるから、あつさり描いてある中に、如何にも羅漢尊者の御德が現はれて居る。この十六羅漢の大利益を蒙つた一人がある。それは明治畫壇の泰斗と仰がれた兒玉果亭翁であつた。

兒玉果亭翁の感奮

果亭翁は元と貧しい一介の農夫に過ぎなかつた。若い頃、この玄峯院で寺男を働いてゐたが、偶々床に掛つてゐた風外禪師の十六漢を見て非常に感じ、朝となく晝となく暇さへあれば夫れを凝乎と眺めて、殆んど自分の身を忘れて立つた。餘りの有難さに、自分も斯んな畫が描きたいと思つた。好きこそ物の上手なれで、覺束ない手付で夫れを眞似しては描いてゐた。ふとその畫を見たのが玄峰院の方丈海印和尙である　そんなに畫が好きならばと、學資を與へて勉强させられる。その後、畔上楳仙禪師も同じ信州で御因緣があつて御世話をなさる。京都にも出で大に勉强した結果、遂に彼の大家となつたのである。が初め風外禪師の畫に憧憬れて畫筆を持つたのであるから、何處かにその畫風が表はれて居る。且つこれがために果亭翁は、屢々羅漢尊者を描かれたが、殊に風外禪師の風致が多かつた。卽ち兒玉果亭翁が明治畫壇に不朽の名を留められ、近世美術史上に一大光彩を放たれたのは、云ふまでもなく風外禪師十六羅漢の利益を蒙られたのである。

これまでに玄峰院へ來て此の羅漢尊像を拜んだものは何千人あつたか知れぬ、然し未だ一人も目前の利益を蒙つたものはなかつた。然るに茲に初めて一人の果亭翁が尊い利益を蒙つたのである。羅漢尊者は初めから隔てなく利益を與へて居らるゝのであるけれども、それを受けると受けぬとは此方の心次第である。『如來一音演說法、衆生隨類各得解』で、如來の說法に變りはないが、聽く衆生は、その根機に隨つて色々と了解するのである如く、願ふ心に依つて、受けむと欲すれば自由に受けらるゝのであるから、お互に先づ尊い信心を運ばねばならぬのである。『罪福報應

種を福田に蒔く

經』にも、

種を福田に種ゆれは、尼倶類樹の一核を種るて。無限の子を收むるが如く、一を施して萬倍を得。

と說いてある。羅漢尊者の福田に、お互が信心の種一粒を蒔けば、應て萬倍の利益を受けらるゝのである。苟も福田の利益を蒙らむとせば、最も頂禮恭敬の誠を盡すべきである。これが卽ち種蒔きである。蒔いた種は必ず生える。信仰すれば必ず感應はあるのである。

信仰と靈驗

善神の守護

八　除災の利益

敲けば門は開かれ、打てば鐘は鳴り、蒔けば必ず生え、信ずれば必ず靈驗がある。正法には元より不思議はないけれども、誠に感應道交難思議である。お互が今、正法護持の御德を讚へて羅漢尊者を敬禮する時は、尊者は啻に正法を懇ろに護持し給ふのみならず、更に敬禮するお互をも守護せられて、惡事災難を逃れしめ給ふ。これを除災の利益と申すのである。『灌頂經』には、

若し當來世の四部の弟子、羅漢に歸依して南無の禮を作さば、萬億恆沙の善神、形を隱して番々この人を守護せん

と說いてある。お互が誠心を以て、南無大阿羅漢と敬禮する時には、羅漢尊者の眷屬たる萬億恆沙の善神たちが守護して下さることは決して不思議はない。『觀音經』には、一心に南無觀世音菩薩と稱名した時には、火も燒くこと能はず、水も漂はす

こと能はず、刀も切ること能はず、毒蛇も害すること能はずと說いてある。觀世音菩薩に既にこの靈驗あれば、羅漢尊者にも亦この靈驗あるを信ぜねばならぬ。古歌にも、「心だに誠の道にかなひなば、祈らずとても神や守らん」とある、正しい心を持ち、正しい行をしたならば、祈らずとでも萬億恆の善神が守護して下さるのである。況んや、誠心を以て羅漢尊者を敬禮するに於てをやである。

羅漢尊者が如何に除災の利益を與へ給ふ御力があるかは、五百羅漢尊者の名號を拜誦しても直ぐ分るので、先づ

破邪神通尊者（第三十一）　金剛破魔尊者（第五十四）　斷煩惱尊者（第二百十七）　降魔軍尊者（第二百八十七）　降伏魔尊者（第三百十八）　壞魔軍尊者（第四百六十六）　拔衆苦尊者（第四百八十九）

など云ふがあつて、各々惡魔降服の御姿である。如何なる惡魔も人を窺ふに餘地がないから、自ら肉體にも精神にも除災の利益を蒙るのである。お互は羅漢尊者の守護に依つて、尊い除災の利益を蒙ると共に、更に自ら進んで、お互自身が破邪神通尊者となり、拔衆苦尊者となつて、大いなる力を持つことを覺悟せねばならぬ。即ち忍耐、努力、精進の人とならねばならぬ。又

堅通精進尊者（第七十）　金剛精進尊者（第八十六）　大忍尊者（第百〇二）　不動尊者（第百二十五）
大力尊者（第百八十七）　精進山尊者（第二百五十四）　不動意尊者（第二百五十六）　勇精進尊者（第四百五十六）

などがある。悉く是れ忍耐、精進、努力の權化である。この羅漢尊者の心を以てお互の心としたならば、人間萬事成らざることはないのである。ナポレオンが不能の二字を辭書から削つたと云ふも、畢竟、この羅漢尊者の御精神に過ぎぬ。青年が學問修行の上にも、商人が事業發展の上にも、軍人が戰場の働きの上にも、會社員が事務執掌の上にも、政治家が國政料理の上にも、軍人工夫工女が工場に働くにも、苟も身を立て家を興さんとするには、勤勉力行が何よりも最も大切である。常に勤勉であれば、決して誘惑も墮落もない。惡事災難の

惡魔降服の姿

精進の權化

身を侵す餘地がない。外には羅漢尊者の守護あり、内には精進努力の意氣あれば、お互に常に無事息災である。風邪を引かぬやうにするには、平生からその用意をして、體育を重んじなければならぬ。平生にその用意があれば、縱令引いても輕い。それを却て自ら不攝生、不養生、不注意にして、罪を風邪に歸するが如きは甚だ不都合である。

信心を第一とす

神佛の御守護を得るには、先づ自分の信心を第一にせねばならぬ、五厘や一錢のお賽錢を上げて、家内安全、商買繁昌、身體健全、心願成就と、山ほどの慾をお願ひしても、佛樣がお聽き下さる道理はない。故に、苟も羅漢尊者の利益を蒙るには、先づ信心精進を第一とするのである。各々信心を運んで精進勇猛であつたならば、軈ては佛果菩提を證得して、この身このまゝ活ける羅漢尊者ともなることが出來るのである。

お釈迦樣は自ら十六羅漢の德を讃歎し給ひて、

若し衆難起らんと欲する時は、當にその名字を呼ぶべし。各々威德を現じて、人のために憂を除き、諸々の厄難を去け、百事吉祥ならん。

抜苦與樂の誓願

と、抜苦與樂は佛樣の大誓願である。羅漢尊者はお互のために憂を除き給ふと共に、常に歡びを與へ給ふのである。除災の利益は、啻に災難を除き給ふのみならず、更に福德吉祥を與へ給ふのである。故に

家庭の圓滿

除憂尊者（第百〇一）　無憂自在尊者（第百〇三）

等の羅漢尊者があると共に、又

歡喜尊者（第百五十九）　遊戲尊者（第百六十）　歡憙智尊者（第二百三十七）　衆和合尊者（第二百六十四）　常歡喜尊者（第三百十二）

と云ふやうな極めて樂天的な尊者もある。故にこの羅漢尊者の心を以てお互の心とする時には、家内は平和に圓滿に、常に春風駘蕩たる家庭を作ることが出來る。羅漢尊者を信仰して、一人々々が歡喜尊者となり、遊戲尊者となつたならば、自ら衆和合尊者となつて、期せずして家庭が圓滿になる。一家既に圓滿なれば、一村一

町も亦悉〻圓滿である。日本七千萬の同胞が、悉〻この羅漢尊者の信仰を持つたならば、日本國中が悉〻常歡喜尊者となるのである。この心を世界的に普及したならば、忌はしい世界の大戰亂、大慘禍を現出することなく、この世界の修羅場を變じて、常に美はしい平和の花園とすることが出來るのである。今日は將にこの常歡喜尊者が活動せんとせられつゝあるのである。これ卽ち『諸々の厄難を去け、百事吉祥ならん』と說かせられたる所以にて、羅漢尊者こそ實に『美の神』『福の神』『平和の神』である。こんな御目出度い佛樣は、皆人共に進んで信仰せねばならぬ。

除災の利益に就いては、宋の蘇東坡に有名な話がある。東坡居士は、彼の『溪聲便是廣長舌、山色豈非淸淨身。夜來八萬四千偈。他日如何擧三示人』の投機の偈で、廬山東林寺の常總禪師に就いて、最も參禪工夫したことを能く知られて居る。その東坡居士が、初め官途に就いてゐたが、政變のために居儋耳と云ふ南方の邊鄙へ謫された。そこで端無くも蜀の金水の張氏が描いた十八大阿羅漢を手に入れた。不思議な因緣で、東坡は恭しく敬禮した。その張氏と云ふは、唐の末頃に於て、羅漢尊者を描くことで最も有名な人であつた。この張氏の玄孫の敏行と云ふが出家して、その頃に成都に居つたが、梵相奇古にして且つ學德兼備の大善知識であり、且つ羅漢尊者を厚く尊信して常に自ら描かれたがために、當時の人々は、羅漢尊者が應現れて張氏の家に生れ、この敏行となられたので、誠に尊いことであると云ひ噂してゐた。その尊い因緣ある張氏の羅漢尊像を今圖らずも手に入れたのであるから、東坡の喜びは一通りではなかつた。その上更に東坡の家に就いても亦、更に羅漢尊者の因緣があつたのである。

東坡の外祖父なる程公が、まだ若かつた頃に京師に遊んだ。その歸途に圖らずも蜀の亂に遇うて、食糧を絕たれ、金錢も奪はれて終つて歸ること能はず、宿屋に困臥して殆んど死を待つてゐた。すると、或る日のこと、大勢の坊さんが又その宿屋に來た。而して程公を見るや否や驚いて、『貴下は御承知ないか知らぬが、私共は皆、

程公と羅漢尊者の救護

貴下と同郷者である。どうして又こゝに居らるゝか』と問ひ、始終の話を聽いて驚き且つ哀れみ、その坊さんが一人に錢二百づゝ出した、それが總てゞ十六人合せて三貫二百文になつた。それを集めて程公に與へ、『これだけあれば路用も有らうから早くお歸りなさいと』親切に世話して呉れた。程公は地獄で佛に逢うた喜び、命の親と感謝した。十六人の僧は何れ後から歸るからと云ふので、程公は道を急いで一人先きに出かけ、軈て恙無く家に歸つた。程公は家内の者にも事の樣子を語り、早速、その十六人の坊さんを尋ねて親しく御禮を申さんとしたが、遂にその坊さんを見出すことが出來なかつた。そこで初めて夫れは日頃、尊信して居つた十六羅漢尊者が、旅僧の姿を現じて我が災厄を除き給ふたのであると分り、今更ながら奇特の靈驗に感じて、一層信心を勵んだと云ふことである。程公は早〻から羅漢尊者を信仰してゐたのであらうが、この除災の大利益を蒙つてからは、更に一層の信心を勵んで、毎年、春夏秋冬の四回、羅漢大供養の大法會を修行し報恩謝德したが、遂に九十歲までも命長して、二百何回と云ふ大供養會を修行したと云ふことである。

誕生日の祈禱

東坡は外祖父のことであるから元より親しく夫れを見なかつたが、祀られた十六羅漢尊者は家寶となり、今もその供養を怠らぬ、故にその家庭的の信仰は東坡の幼少の折から敎られてゐたのであつた。この尊い羅漢尊者の因緣ある自分が、今、張氏の十八羅漢を得たのであるから、誠に難値難遇の思あり、感慨、胸に逼つた。遂に畢生の文才を絞つて其の讃を作つた。而して自分の家には外祖父程公からの十六羅漢尊者があるので、この十八羅漢尊者は弟の子由に與へ、その夫婦の誕生日に羅漢供養會を修行せしめて、無病息災、家内安全を祈らしめたと云ふことである。

羅漢尊者には、興隆の利益あり、福田の利益あり、除災の利益あるのであるから、寺で供養すれば其の寺門興隆の祈禱となり、家で供養すれば、その家の家門繁昌の祈禱となる。亡くなつた人のために供養すれば、その人の頓證菩提となり、誕生日に供養すれば、その人の息災延命となるのである。羅漢尊者にこの神力あるがため

に、能く佛法守護の力を現はされたのである。卽ち求むるお互の信心と、與へらる
る尊者の神力と、互に感應道交した時に、初めてこの靈驗あり、冥感あるのである。

社頭祈世の御製

明治天皇は『社頭祈世』の御題に、

常しへに民やすかれといのるなる
我が世を守れ伊勢のおほ神

と御製遊ばされ、昭憲皇太后も同じ御題にて

神たせの伊勢の內外のみやはしら
ゆるきなき世を猶ほ祈るかな

と御詠遊ばされた。我が民を子の如くに愛しみ給ふ陛下の大御心は、伊勢の大神も
必ずや納受ましまして、自ら國運發展、天下靜謐のために御守り下されて居るの
である。これは理窟ではない。お互が羅漢尊者の前に御祈禱する時には、尊者は必
ずやその心を納受し給ふのである。『祭文』に、

般若の錦帆

羅漢尊者は、般若の錦帆を張つて、煩惱の欲海を超ふ。一生、生淸く潔く。一
歩、歩精く修す。體は百錬の鎔金の如く。心は一輪の孤月に似たり。

大智慧と大力

とある。般若は智慧である。神通の船に智慧の帆を擧げて、波風荒い煩惱の欲海を
超え、こゝに溺れて居る一切衆生を助け給ふのであるから、助けを呼ぶ者を見捨て
給ふの道理はない。羅漢尊者は神通力は、慈悲の權化なると共に、智慧の結晶であ
る。この智慧が卽ち三明となり六通となり、或は五力となり八解となつて實社會に
活用して行くのである。五百羅漢尊者の中には、

智慧燈尊者（第二百二十七）　智慧海尊者（第二百四十四）

等がある。智慧の燈を輝かして、世の闇を照し給ひ、海の如き無量の智慧を持ち
給うて、成し能はざることないのである。この大なる智慧あり、不退不休の精進力
があつて、常に衆生のために無量無邊の利益を與へ給ふのである。私共は只この
御力、御德、御智慧を深く信じて、專ら除災の利益を蒙つて、圓滿なる家庭に、幸

福なる生活を營み、平和なる生涯を送ることを心掛けるのである。西行法師が伊勢大廟に參籠して詠じた、

何ごとのおはしますかは知らねども
　かたじけなさに涙こぼるゝ

との歌の心持を十分に味つて、自分の小さい智慧や、我見や我慢をすつかり打捨て、一心一向に羅漢尊者を敬禮すれば、屹度、尊い御利益を蒙ることが出來ます。これは決して理窟ではありませぬ、唯信ずるのです。

九　無窮の利益

月を標すの指

羅漢尊者の御働き、御德は、興隆の利益、福田の利益、除災の利益の三で既に述べ盡くした。若し一々細かに說くならば、何程述べても所詮述べ盡くすことは出來ぬ。書いたり喋つたりするは、畢竟、是れ月を標すの指、門を敲くの瓦に過ぎぬ。若しこれを以て羅漢尊者の德は盡きだりとなし、信仰を誤る者あらば、甚だ尊者の廣德、神力に背くものである。「式文」には猶ほ世尊の舍利を供養するの一時が明してある。これを知ると、更に羅漢尊者とお釋迦樣との有難い御因緣が合點出來るのである。卽ちその文に曰く、

羅漢の世間に現住し、末世の人法を護り給ふは、世尊、在世の昔、懇ろに付屬し給ふが故なり。然れば、羅漢に託して、我れ等を哀み給ふ、猶ほ廣大の恩德なり。況んや金剛の舍利を遺して、迷黨を利益す。豈に報謝せざらんや。雙林の暮には

慈愍大悲の涙を流し。菩薩、聲聞に我れ等を付屬し。五濁の朝には、堅固の骨舍利を留む。神變利益、佛事を施作す。在世滅後の哀、生身碎身の惠み、得て稱ふべからざるものなり。仍て無窮の利益を仰がんがために、伽陀を頌し、禮拜を行すべし。

とある。卽ちお互が今日、羅漢尊者の利益を蒙り、その御供養を申上げるに就いても思ふは尊いお釋迦樣の廣大なる恩德である。お釋迦樣が正法護持を付屬なさつたればこそ、羅漢尊者は今日猶ほ世間に現住し給ふのである。若しこの付屬がなかつたならば、他の菩薩と同じく、疾くに涅槃の雲に隱れ給ふたのである。唯、佛勅を奉じて、末法の人法を護り給ふの尊きを知ると共に、深くお釋迦樣の廣大なる恩德を報謝せねばならぬのである。

お釋迦樣の廣大なる恩德は、唯これのみではない、更に自ら金剛の舍利を留め給うて、末世の衆生をして親しく頂禮せしめ給ふのである。お釋迦樣の肉體は、八十年を一期として、涅槃に入らせ給ふたので、その後の弟子や衆生は、再び紫磨黃金の御肌を拜むことは出來ぬ。それを愍み給ひて、末世の衆生をして親しく佛身を頂禮し結緣せしめんがために、御肉體の淸淨結晶たる舍利を留め給ふたのである。御舍利は卽ち御肉體である。『華嚴經』には、

應に隨つて、一切天人龍鬼等を化せんが爲めの故に、全身を碎抹して、舍利を示現す。

と說いてある。お釋迦樣は大慈大悲の餘り、機緣に應じて一切衆生を敎化せんがために、一丈六尺の全身を碎いて舍利を留め給ふたのである。この舍利を拜んで、信仰を起すものもあれば、その舍利に觸つて、業累を脫して頓證菩提するものもあるのである。佛法興隆の大檀那たる阿育王は、この佛舍利を四方に分けて、七寶の舍利塔を八萬四千基も作られたと云ふことで、印度、錫蘭、暹羅は勿論、遠く支那にまでも普及して、三千年後の今日猶ほその遺物を拜することが出來る。これ卽ちお

舍利の功德

釋迦樣が舍利を遺し給ひし御精神を更に相續されたのである。この舍利塔を拜んだ人々は、未だ佛法を知らざる者は初めてこの尊きを知り、既に佛法を信じた者は更に隨喜、奮發の心を發すのである。これ皆お釋迦樣が一切衆生を愍み給ふの大慈大悲である。その舍利の一分が、先年、暹羅の皇室から日本の佛敎徒に御分ち下され、遂に名古屋に壯大なる覺王山日暹寺が建立せられ、立派な舍利塔も建つたのは、誠に難値難遇の好因緣で、お釋迦樣がこの舍利を留め給ふたお蔭に、三千年を經、三千里を隔てた此の日本に在て、お互が親しく佛身を頂禮することが出來るのは實に有難いことである。就てはその大慈大悲の恩德を報謝し、信心奮發せねばならぬ。

お釋迦樣にこの大慈大悲あつたればこそ、末世のお互が猶ほ羅漢尊者を仰ぐことが出來たのであるが、又、羅漢尊者が神力廣德なればこそ、能く今日まで佛法を守護し給うて、忝くも佛舍利を拜することが出來るのである。お釋迦樣の恩德と、羅漢尊者の恩德とは、何れが優り、何れが劣るの道理はない。お釋迦樣あつての羅漢尊者、羅漢尊者あつてのお釋迦樣で、正にお釋迦樣は卽ち羅漢尊者、羅漢尊者は卽ちお釋迦樣と云ふべきであつて、遂にお釋迦樣と羅漢尊者とは二にして不二である。故にお互は、羅漢尊者を頂禮すると共に、お釋迦樣の恩德をも報謝するのである。卽ち我々お互は、活ける羅漢尊者なると共に、又活ける釋迦牟尼佛であることを知らねばならぬ。

釋尊と羅漢尊者

松雲和尙の發願

羅漢尊者の因緣も數ある中に、最も有難いのは本所の羅漢寺の因緣である。これは前に話した如く行誡上人が殊の外御心配下さつた因緣があるが、寺は黃檗宗で、只今は市外目黑に移轉して居る。その開基は松雲元慶和尙で、生ける藏經の開版者鐵眼道光禪師の弟子である。言ひ傳へには、松雲和尙は京都の佛師屋の子であつたと云ふことである。豁然と大悟する所あつて鐵眼禪師に就いて出家剃髮したのは二十三歲の時であつた。偶ま行脚して九州に遊び、錫を耶馬溪の羅漢寺に留めた。その奇峭幽邃なる山水と共に、照覺禪師が信仰の結晶たる五百羅漢の石像が、儼然た

江戸に五百羅漢

る尊容を拜し、頻に大信心を奮發し、潛に自らも亦、因緣の地を求めて五百羅漢像を彫刻せんと祈願した。殊に我が師匠鐵眼禪師は、藏經開版のために一代の心血を灑いでゐらるゝのである、その弟子たる自分も、末代に殘る大事業を成就せんと誓はれたのである。間もなく歸省して、その誓願を師匠鐵眼禪師に語らるゝと、禪師も殊の外喜ばれたので、松雲和尚は決然として玆に發起せられたのである。

當時は黃檗宗の全盛時代で、京都、大阪地方は申すまでもなく、幕府の城下たる江戸には、瑞聖寺や弘福寺が建つて、愈々大勢力をを占めんとして居る時である。先づ事業をするに最も有望なるは江戸である。而して江戸には、未だ一ヶ所も五百羅漢の勸請された所がないと知り、松雲和尚はこれ屈强の發願所と、飛び立つばかりに喜んで、直ちに江戸へ來た。而して衆生緣の最も深い淺草の觀世音の塔中を借りて錫を留め、愈々五百羅漢木像彫刻のことを發起して、十方の施主を勸化した。直に弘福寺鐵牛禪師の隨喜を得て、先づ第一の尊者僑陳如の木像、等身の一軀を刻

んだ。松雲和尚の喜びは譬ふるに物無い。これを佛間に祀つて、觀世音參詣の善男善女を勸化し、且つ自分は江戸市中を托鉢して、大にこの事を發表して、心盡しの寄附を集めた。が、その費用は莫大にして、集る金は極めて僅少である。松雲和尚は降つても晴つても、毎日々々、淺草の寺を出ては江戸市中を托鉢して歩いた。月日に關守なく早や五六年は夢の間に過ぎて、未だ思ふほどの資金は集らぬ。朝な夕な、羅漢尊者の寶前に祈願しても、因緣成就の日の甚だ遲いのを嘆いた。

或る日の朝、何時もの如く托鉢して程近き淺草の藏前に行つた。藏前には江原佐兵衞を初め都合十六軒の札差があつて、何れも鉅萬の富を持つて居る。丁度、松雲和尚が佐兵衞の門前に立つて「乞う」と呼ばれた折も折、主人佐兵衞は用事あつて家を出る所であつた。元より心ない佐兵衞は、この乞食坊主めと、素氣なく出て行つた。松雲和尚は思はず熱い涙に袈裟を濕された。あゝ可哀想に、今幾萬の富を擁してゐても、一つの息忽ち消え、二つの眼瞑く閉ぢた時、その富はドウするか。持つ

て行くものは善惡二つの業のみでないか。今日こゝで逢つたは誠に尊い因緣、正しく羅漢尊者の御化導である。せめて其の建立の施主となつて、先世の罪障消滅と共に、未來の頓證菩提こそ願はせて遣りたい、おゝ左うぢや、この心無き一人を化導するこそ、五百の佛體を作るにも增した功德であつ、この一人を化益せずんば、我が誓願も空しかるべしと、心に確と決せられた松雲和尙は、何處を的度と云ふこともなく、佐兵衞の後を追うて『乞う〳〵』と呼びつゝ行かれた。佐兵衞は淺草橋を渡つて日本橋に出て、京橋、新橋を經て芝に入り、宇田川町から田町を經、高輪の木戸を通つて八ッ山に來り、品川のとある家に入つた。松雲和尙はその跡を追つて遂に二里以上の道を品川まで來たのである。佐兵衞も初めの程は氣も付かずにゐたが、途中から夫れと氣が付いた、五月蠅い乞食坊主がと思つたが、更に多少の奉加を出す心も起らなかつた。

小半刻も費つて用事を終へたので、その家を出ると、前には松雲和尙がまだ立つて居る、えゝイ執拗い坊主め！と獨語いたが、さて思へば餘りの熱心に感じ、狂氣でもなさゝうなので『お前は何處の坊さんか』と尋ねる。松雲和尙は喜んで、五百羅漢木像彫刻の大誓願を途すがら語り、早や五六年は空しく過ぎた、この樣なことでは何時成就するか誠に覺束ない、袖振り合ふも他生の緣とやら、貴下も未來の福報を植ゑ、又その上に今世の利益を蒙るやう、我がために大檀那となつて、何卒この大願を成就せしめ給へと、誠心籠めて勸化せられた。血を絞るやうな說敎。一語〳〵々々に、佐兵衞の頑固な心は動いた。始終を聽いて佐兵衞は更に感動した。その尊い御志、その强い御信念も知らず、今日まで空しく過ぎたことは、如何にも殘念であつたが、貴下がこの愚かなる佐兵衞一人を捨て給はず、斯くも親切に敎化し給ふこと、實に感じ入り申したと、佐兵衞はこゝに一念發起して、その大檀那になることを誓ふと共に、自分の親族の者等、札差の仲間が他にも十五軒あれば、この十五軒と力を合せて御助成申さんと約束した。遂に佐兵衞が施主となつて、十五軒

江原佐兵衞の感喜

札差十六人隨喜

の連中にも語り勸めると、佐兵衞殿の發起ならばと、一人も異存はなし。茲に一時に十六人の大檀那が出來た。この話が江戸中に響き渡つて、我れも〳〵と寄附を申出づるものが出來た。松雲和尙は今は托鉢して少しばかりの金を集める苦勞もなく、專心一意に彫刻に掛つた。五日に一軀。十日に一體と、一刀三拜丹誠籠めて彫刻し、遂に前後十餘年を費し、目出度成就し、元祿八年に至つて羅漢寺と公稱するに至つた。松雲和尙はこの大誓願の成就を喜ばるゝと共に、これ偏に江原佐兵衞外十五人大檀那の助緣に依ると深く心に銘ぜられ、自ら刀を取つて此の十六人の木像をも刻まれて、羅漢尊者と共に本堂に祀られた。この十六人こそ正に有髮の十六羅漢にして、或は化導のために、身を在家に現はし給ふたのでないかと思はれる。この十六人の木像あるは、羅漢寺の因緣に更に光彩を添へたものである。

世の中に一番强いものは信仰の力である。松雲和尙が熱烈なる信仰の力は、遂に江原佐兵衞等の心を動かした、而して十有餘年を費して其の大願を成就した。松雲

信仰の結晶

和尙の熱烈なる信仰は、不退不休の精進となつて、遂にこれを完成したのである。その五百羅漢の木像は、悉く松雲和尙信仰の結晶であり、松雲和尙の舍利である。和尙の肉體は羅漢寺の墓に朽ちても、その精神は此の羅漢像と共に茲に殘つて、常に幾十人の人を敎化して居る。和尙は一切衆生敎化のために、自分の舍利として之れを留められたのである、この大慈悲心を報謝せねばならぬ。時に盛衰あり、寺に興廢あつて、行誡上人の如き活羅漢が世に出でて、この寺のために盡くされしも、實に松雲和尙の建立誓願に深く隨喜せられたからであらう。羅漢尊者は時を隔て、世を隔て、或は松雲和尙となり、或は江原佐兵衞となり、或は行誡上人となつて、常に末世の人法を守護し給ふのである。こゝにお釋迦樣や羅漢尊者の無窮の利益あることを知つて、有難く頂戴せねばならぬ。

十　人々の活羅漢

羅漢尊者の信仰

羅漢尊者の信仰は、佛滅後の夕より既に印度にあつたのであるが、更に佛敎が支那に傳へられてからは、正法興隆の利益あることゝて、一層尊信せらるゝことゝなつた。然るにその御尊像は、まだ畫にも描かれず、木にも彫られなかつた。その御尊像が出來たのは、唐の禪月大師から初まつたと申すことである。禪月大師は、學德兼備の高僧であつた、且つ繪心のあつたお方である。平生から深く羅漢尊者を御信仰して居られたが、さて其の尊容を仰ぐことが出來ないのを、非常に遺憾に思はれて、せめて夢中にでも拜したいと、頻りに祈誓を籠められた。大師の至誠や尊者に感通ましましけん。或る夜、靜かなる夢中に、縹緲として羅漢尊者が出現し給ふた。

禪月大師の羅漢感得

禪月大師は我れを忘れて南無大阿羅漢と合掌頂禮しつゝも、早く筆を採つて其の尊容を寫さんとして、遙に微妙奇古の梵相を仰ぎ數へらるゝと、十六羅漢と思ひの外、十五人しか居給はぬ。今一人は何處に在すか、早く出現し給へと、待つてゐる間に、夢は果敢なくも覺めた。尊者は悲嘆遣る瀨なく、日頃念ずる羅漢尊者の尊容を仰ぎつゝも、一人を缺き給ふは殘念やな、願はくば今一度、感得して十六尊者を拜せんと祈願せられた。

明る夜、また夢中に感得せられたが、不思議なる哉、矢張り十五人であつた。次の夜も又その次の夜も、屢々感得せられたが、何時も同じ十五人の姿で、ドウしても一人缺けて居るので、大師は機緣未だ熟せざるかと、心窃に憂ひて居られた。偶ま告ぐる者あつて、缺けたる其の一人は、大師御自身の相好が乃ち夫れであると云つた。大師は卽ち活ける羅漢尊者であると告げた。これを聽いて大師は、豁然として大悟せられ、遂に水鏡に我が相を寫し、初めて十六羅漢尊者を描かれた。これが羅漢尊者の原圖で、この後その人の信仰や研究、技量や手腕に依り、年代を經るまに、色々な型が出來たのである。

自身是れ羅漢

美濃の龍泰寺に佛乘慈僊禪師と云ふ高德な方があつた。明治の初年に遷化せられたが、彼の狠玄樓と呼ばれて機鋒の極めて峻烈なる玄樓黄龍禪師に參ぜられたお方で、一方の大宗師であつた。禪餘の遊戯、何處で學ばれたものか、畫が大へんお上手であつた。殊に羅漢尊者を御信仰になつて、常に羅漢尊者をお描きになつた。禪師は初めより翰墨を以て道樂となさつたのではなく、これを以て禪を皷吹されたのであるから、常にお描きになる畫題は、寒山拾得や六祖大師、出山の釋迦や達磨大師と云ふやうに禪畫ばかりで、風流めいた山水などは殆んどお描きにならなかつた。その中でも十六羅漢を一番餘計にお描きになつた。その十六羅漢の粉本は、禪月大師夢中感得の尊容のみであつた。何枚お描きになつても常に夫れであつたが、これは正しく禪月大師の信仰的製作に隨喜せられたものであらうと思ふ。殊に禪月大師御自身が羅漢尊者なることを示した所に、最も偉大なる敎訓があつた。佛乘禪師も亦自ら羅漢尊者の遊戯神通として畫筆を採られたのであるから、こゝに大なる

佛乘禪師の羅漢圖

最乘寺の傑作

意義があらうと思ふ。龍泰寺は最乘寺の末寺であるから、佛乘禪師も最乘寺へ輪番をお勤めになり、丁度、一年間最乘寺にもお居でになつた。この間に御開山への報恩のために、丹誠を籠めて同じく禪月大師夢中感得の十六羅漢を極めて密畫で而も極彩色でお描きになり、最乘寺へお納めになつた。これは禪師が一代中の傑作の一つであると申します。禪師は常に信仰を以てお描きになつたのであるから、畫の上に衒氣も市氣もない、唯禪氣が横溢して居るのみで、梵相の奇古なる所に云ふべからざる氣品があり、如何にも羅漢尊者らしい氣分が現はれ、自ら手を合せ頭を下げるのは、迚も普通の畫工などの及ぶ所でない、同じ畫を描くにしても、信仰を以て描いたものと。商買氣を以て描いたものとは、畫の上手下手を離れて、自ら氣品が違つて居る。佛乘禪師の如きは、最も深く禪月大師に私淑せられたので、或は日本の禪月大師と云ふも、決して誣言ではない。

思ふに禪月大師御自身が、卽ち十六羅漢尊者の御一人であると云ふことは、誠に

尊い因縁である。羅漢尊者を外に求めるのは迷ひである。悟つて見れば、人々是れ活ける羅漢である、箇々面々の阿羅漢、人々一座の耆闍崛である。こゝに大悟徹底してこそ、始めて羅漢尊者信仰の甲斐のあるものである。古歌にも

夜もすがら佛の道をもとむれば
　我が心にぞ尋ね入りぬる

で、だん〳〵佛の道を次から次へ尋ねて行くと、遂に我が心の中にあることに氣が付くのである。その近い所にあることを知らずして、之れを遠きに求むるから、遂に大悟透脱の時がないのである。既に羅漢尊者の神力を思ふと共に、お釈迦様の恩德を思ひ、お釈迦様と羅漢尊者とは、二にして不二なるの道理を知らば、お互我々は、活ける羅漢尊者なると共に、又活ける釈迦牟尼佛なることをも知らねばならぬ。

佛と我が心

即ち承陽大師が、

謂ゆる諸佛とは釈迦牟尼佛なり。釈迦牟尼佛是れ即身是佛なり。過去現在未來の諸佛共に佛と成る時は、必ず釈迦牟尼佛と成るなり。是れ即身是佛なり。即身是佛といふは誰といふぞと、審細に參究すべし、正に佛恩を報ずるにてあらん。

即心是佛

と御示しになつてをる。三世十方の間に無量恒河沙の諸佛が在ますけれど、畢竟唯、釈迦牟尼佛お一方である。抑も釈迦牟尼佛とは萬德總持の御名號である。これは元と梵語であるから、釈迦は能仁と譯するのである。能仁とは、大慈悲心の德號である。牟尼は寂默と譯するのである。寂默とは大智慧の德號である。即ち寂は身と意とに於て諸々の過患なきこと、默とは、口に於て諸々の忿爭なきことである。佛は般若の大智慧を成就し給ひ、以て一切の煩惱を離れ、生死の繫縛を脫し、身口意の三業に於て、純全無漏の妙德を顯はし給ふが故である。斯様に大慈悲と大智慧との二つの德が圓滿にならせられたのが即ち佛様である。お互が佛様を御本尊として御歸依するのは、即ちこの大慈悲光と大智慧力とに歸依し奉るのである。この御歸依の功德は、自ら佛様の大慈悲と大智慧とを感得して、お互が本來具有の大慈

釈迦牟尼の釈義

悲、大智慧の値を現はすことゝなる。一切の衆生は一として、佛樣と平等の大慈悲、大智慧を有せざるはない。唯、煩惱妄想のために種々の惡業を造り、業力の致す所自ら三界六道生死の繫縛を招き、邪見の暗、常に覆ひ、苦惱の夢、永く覺め難いのである。この夢を覺まし、この暗を拂ひ、我が身は卽ち佛の身なり、我が心は卽ち佛の心なりと云ふ境界に至らしむるが、卽ち佛敎の目的である。この目的を達して我が心卽ち是れ佛なりと悟つたのが卽心是佛と云ふのである、古歌にも『釋迦、阿彌陀、地藏、藥師と名はあれど、同じ心の佛なりけり』とある。羅漢尊者の大智慧と大慈悲とは、卽ちお釋迦樣の大慈悲と大智慧と同じであつて、この大慈悲と大智慧とを、お互も亦本來具有して居ることを知つて、卽心是佛と悟ると共に、また卽心是羅漢と悟らねばならぬ。

既にお互が卽心是佛なり、卽心是羅漢なりと悟ると共に、お互の居る所が卽ち是れ靈鷲山である、耆闍崛山である。常濟大師が、

佛敎の目的

この會は是れ靈山會なり

如來の正法流轉して一毫髮も缺くることなし。然ればこの會は是れ靈山會たるべし。靈山は是れこの會たるべし。たゞ諸人の精進と不精進とに依りて、諸佛、頭出頭沒するのみなり。今日も頻りに辨道し、子細に通徹せば、釋尊、直に出世なり。たゞ汝等、自己不明によりて、釋尊、昔、入滅す。汝等既に佛子たり。何ぞ佛を殺すべけんや。故に急に辨道して、速に慈父と相見すべし。

と仰せられた。この道場は是れ靈山にして、靈山は卽ちこの道場である。寸步を動ぜずして釋尊と相見し、羅漢尊者と相見するのである。この身を離れ、この心を離れては、お釋迦樣もなければ羅漢尊者もなく、靈山もなければ耆闍崛山もない、眞に是れ卽心是佛である。

蘇東坡が南海流謫の時に得た張氏の十八羅漢は、その後、峨眉山に納められたが、展轉して日本に來た。それが廻り廻つて黃檗山內の壽泉寺元超和尙が手に入れられた。これは誠に稀代の逸品であるから、傳家の寶としたい、就いては跋文を書いて

獨吼禪師の跋文

吳れと隱元禪師の弟子なる獨吼性獅禪師に賴んだ。乃ち禪師が書かれた跋文に、

此の十八尊者は、五神通を具し、四果の位を證し、皆、如來の記別を受け、滅度を許さず。故に在す處、神變不可思議なり。端無く人に描着せられて、海外に流る。梵相奇古、飛動せんと欲するが如し、甚だ人を悅ばしむ可し。壽泉玄公之れを得て、時々瞻禮して置かず。因て携へて室に入り、余が序を乞ひ、以て傳家の寶と爲さんと。予云く、傳家の寶と爲さんと欲せば、自己の體を返觀せんと欲するに若くは莫し。苟も能く自心の體を返觀せば、廣大に悉く四聖六凡を備ふ之れに絲て三昧六通を建立し、之れに絲て乾坤日月、江海山川を發現し之れ絲て斯に出生する時、便ち卷を撫して一笑すべし。予尙ほ何をか言はんや。（原漢文）

傳家の寶

自己の主人公

とある。これを約めて言へば、眞箇の羅漢を得んと欲せば、唯自心に返觀せよと云ふのである。この人々心中の活羅漢尊者こそ、自己の主人公とも申すのである。この活羅漢尊者に相見した時が、初めて本來の面目とも本地の風光とも、自己の寶藏とも云へるのである。この時こそ、この欲界の幻身そのまゝに、五力八解を得、三明六通を得て、神通變化、遊戲自在の人となり、羅漢尊者が佛の遺囑に依つて世間に現住して佛法を護持し給ふ如く、お互も自分の身を忘れて、この活社會のため、活世間のために、大誓願を發し、大精進を起し、布施や愛語、利行や同事等の菩薩行を勵んで行くのである。この活動が出來てこそ、初めて活ける羅漢尊者である。

菩薩行の實踐

只己れは羅漢尊者であると威張つて、何もしないで遊んでゐるやうなハタ羅漢では困る。或は酒を飲んで人に迷惑をかけ、又は罪を犯して警察の御厄介になるやうな羅漢では申譯がない。自ら羅漢尊者と威張るからには、殺賊、無生、應供の三義を立派に具する人とならねばならぬ。學問もあり、智識もあつて、敎育勅語の謂ゆる『智能を啓發し、德器を成就し』た高尙なる人格を作り、社會的活動をするのが、抑も羅漢尊者信仰の目標となつてをるのである。

正法興隆と云ふも外ではない。『佛法は世間法に異らず、世間法は佛法に異らず』

遺法護持の目的

で、佛法と世間法とは、卽ち一である。社會に活用しない宗敎では駄目である。三寶興隆すれば卽ち國家興隆するのである。羅漢尊者が遺法を護持し、正法興隆し給ふ目的は、唯一切衆生をして大安樂を得せしめんとの一事のみである。實に涙の漏れるほど有難い大慈大悲である。故に『法住記』の終にも、

この法住記は、古昔より諸師、展轉相承誦持して忘せず。一切の國王大臣、長者居士、諸々の施主等、因果を了達し、生老病死、芭蕉、幻焰、泡沫の身を厭ひ、諸々の勝業を修し、當來世に於て、彌勒に逢事し、煩惱を解脫し、大涅槃を得、愛樂を生ぜしめんがための故に、佛の正法に於て、護持建立して、久しくして滅せざらしむ。

と說いてある。人をして人生の大目的を達し、大安樂の生涯を送らしめんとするが『法住記』の精神であつて、これが卽ち羅漢尊者の精神であるのである。若しお互が不幸にして羅漢尊者を知ることが出來なかつたならば、遂に冥きより冥きに墮ち、

妙義寺の雪舟羅漢

闇より闇に彷徨ふのである。それに付けても木像は、年を經れば破損み、雨に濡れて汚れ、火に逢うては燒けるから、早く燒けず、濡れず、破損まぬ自己心中の活羅漢を頂禮せねばならぬ。

石州益田の妙義寺には、畫聖と仰がれて居る彼の雪舟等揚禪師の描かれた十六羅漢がある。寺第一の寶物であるが、既に四百年から經つて居るので隨分、破損んで居る。それを天下の名幅であるからと、來る人々が拜覽を願ひ出る。お寺では誠に厄介千萬で、その度毎に寶藏から出して來て、十六幅を書院へずらりと掛け、拜覽が終れば直ぐ後片付けせねばならぬ。雨天などは、濕氣を受けるからと斷るが、天氣の快い日にはソウも行かぬ。が、卷き展べするたびに臺紙は破損む、それを見る寺の者は、自分の骨肉を削らるゝやうな思ひがする。と云ふので、今日では普通の者には容易に拜覽させぬが、それでも一年の中には、已むを得ず出さなければならぬことが屢々あるのである。今の住職岩本探玄師は、ほと〳〵困り拔いて居らるゝ

寶物の番人

ので、先年も村上博士が益田へ行かれた時、例に依つて拜觀に出られた。その砌岩本師は自分の感想を語つて『住職は寶物の番人である、これあるがために、寺では非常に迷惑する』と話されると、博士は殊の外感ぜられ、深く同情せられて、その後處々でこの話をしては、有形的の寶は、持つて居れば居るほど手數がかゝり、蟲干もしなければ修覆もしなければならぬ。保存法も講じなければならぬ。寶に厄介である。而して火に燒かれ、雨に汚れる。汚れないやう、燒かれないやう、破損まないやう、又は盜まれぬやうにと、ドレ位苦勞をしなければならぬか知れぬ。且つ尊いと云ふた所が、五萬兩か拾萬兩と相場が決つて居る　形があると共に價も有る。故に斯樣な寶に心を勞するよりも、早く自己心中の寶藏を開いて、無價の寶を求めねばならぬ。との意味を演べられたさうな。

無價の寶は用ふれども盡くることなし。火に燒かれず、雨にも汚れず、蟲蝕や盜難の心配は更にない。何の手數も雜作もない。一たび之れを得たならば、萬劫末代、亡くなることも失ふこともない。實に結構な寶である。獨吼禪師が『傳家の寶とせんと欲せば、自心の體を返觀せんと欲するに若くは莫し』と云はれたのは是れである。この寶が卽ち是れ活ける羅漢尊者である。この寶のある所が卽ち耆闍崛山である。されば耆闍崛山も我が心中にあれば、十六大阿羅漢も、五百大阿羅漢も、皆我が心中に遊戯し給ふのである。卽ち是れ人々活羅漢である。故にお互に信心奮發して、羅漢尊者として愧かしからぬやう、羅漢尊者らしい働きをして、國家社會のため、慈悲心、孝順心を運び犧牲的精神を發揮せねばならぬ。

自己心中の活羅漢

一家に一人の活ける羅漢尊者出づれば、その家はそのまゝ耆闍崛山となり。一村に一人の活ける羅漢尊者出づれば、その村がそのまゝ耆闍崛山となる。日本七千萬の同胞が、互に羅漢尊者の心を以て心とし、羅漢尊者の行持を行つたならば、我が大日本帝國がそのまゝ耆闍崛山となり、羅漢寺となり、或は天台山となり、雁宕山となり、羅漢尊者應現の道場となり、このまゝ極樂世界となるのである。人々脚下

悉く是れ黄金地、お互の脚下が直ぐ極樂淨土である。承陽大師は「佛道は脚跟下に在り」とお示しになつた。佛法は決して遠方にあるのではない。羅漢尊者と云ふのも、決して山の中や雲の上に御座るのではない、お互が自ら朝々、羅漢を抱いて起き、夜々、羅漢を抱いて臥て居るのである。この道理を能く合點して、自ら血の滴るやうな熱烈な信心を運んだ時には、木像も畫像も、そのまゝ有難い光明を放つに至るのである。こゝに信心發起して貰はねばならぬ。

羅漢尊者の因緣

―〈終〉―

我國に於ける羅漢像

戸部隆古

羅漢圖像の我國に行はれたのは、既に古い昔の事であるが、然しそれは十六羅漢、五百羅漢と、現今我等が概念に存する羅漢像と違つて、比丘又は聲聞の意味に於いて畫かれ、彫刻せられたものである。

其の最も古さものに至つては、推古天皇の御代のものと確定さるゝ玉蟲厨子の臺坐の正面に畫かれた舍利供養の圖に於いて見る事が出來る。次には法隆寺金堂四壁に畫かれた四佛淨土の圖中、又小壁の上に畫かれた圖に於いて認める事が出來るが、元來その金堂の年代が未だ確定を見ないから、從つて其の畫の年代も定める事を得ないけれども、再建非再建何れにしても推古時代より元明天皇の時代にまでに畫かれたもので、其の古さに至つては依然として第二位にあるものである。

次には矢張り法隆寺五重塔内に作られた、塑群像の中に見る事が出來るが、佛涅槃、維摩文殊問答、舍利分配、彌勒淨土の四像の中で、何れも盛んに聲聞衆の像を見受けられ、佛涅槃像の中に於いての比丘形は、愁歎泣涕自から禁じ得ぬ其の有樣は、誠に生動の感があるもので、これが我國最初の聲聞形の彫刻であつて、殊にそれが塑像である事は、全く珍中の珍であると云はねばならぬ。

既にして天平十九年二月十一日を以て勘錄せられた大安寺資財帳の中に。

羅漢畫像九十四軀、金剛力士形八軀、

梵王帝釋波斯匿王、毘婆沙羅王像。

右平城宮御宇　天皇以天平八年歲次丙午造坐者。

とあるけれども、今日は其の影さへ忍ふことが出來ぬ。然し山城國勸修寺に古來藏する繡像の釋迦說法圖に於いて、又多少の聲聞像を認める事が出來るが、皆何れも胡貌を有した頗る妙な風をして居る所、法隆寺塔中の比丘像に似て居る。

又、寶龜十一年十二月廿五日に勘錄せられた西大寺の資財帳に。

羅漢像三軀、各高五尺六寸

羅漢像一軀、高二尺

羅睺羅像二軀、各居一尺

と記載されてゐる。猶ほ又諸寺緣起集の興福寺緣起の中、中佛院の所に

羅漢僧像四軀、二各三尺八寸、一、三尺六寸、一、三尺

又同記同寺五重の塔の條に

塔本東方藥師淨土變藥師佛一軀、脇侍二軀、羅漢像二軀　中略

北方彌勒淨土變彌勒佛像一軀、菩薩六軀、二金色、羅漢像四軀

とあり又、圓堂院の所に、

羅漢像二軀、各高五尺五寸

等の記載があるが續いて西堂の所に、

西堂釋迦丈六像及挾侍菩薩十弟子、八部神王等像、緣起者皇后藤原氏爲先妣贈從一位縣因濃養橘氏忌日所レ造、皇后踐二霜露一以崩レ心觀二誕塚一而傷レ懷永言二追孝一欲レ報二罔極一、爰寄二良工一令レ摹二遺像一兼復設二齋講經一屈レ僧施レ財、是年天平六年甲戌正月十一日也。

これに依つて見ると皇后卽ち光明皇后が其の母君橘三千代夫人の冥福を祈らるるが爲めに、天平六年正月十一日に造られたことが判るが、現今同寺に安置せられて目下、奈良の博物館に出陳せらるる十大弟子像は又それであらう。然してそれに依つて見ると、この像は何れも皆挾紵像であつて、等身のものであるが、精巧を極めた手法より整つた樣式等、實に我國彫刻史上の華である。而して其の中でも富樓那と須婆提と羅睺羅の像が最も秀れて居る。又先達て大倉集古館を參觀した時、矢張り十大弟子の一軀とも見受られる像があつたが、恐らくこの十大弟子の中の一體か、若しくはこれ等の像を模して造つたものであらう。猶同記西佛堂の所に、

羅漢像十軀　羅睺羅形一軀　梵天像一軀、中略八部神王師子形二頭。

とあるが、恐らくこれは光明皇后御奉納の前記のものを重記したものであらふ。又正倉院古文書中に記載される六宗厨子の繪の中に。

第三　三論厨子に須菩提
第四　律宗厨子に迦葉遺
第五　薩婆多厨子に大目健蓮、富樓那
第六　成實厨子に舍利弗、羅睺羅、阿難

等の像が畫かれたことが記載されてあるが、現今東大寺に所藏せらるゝ俱舍曼荼羅なる藤原時代初期の繪畫があるが、その中に矢張り大目健蓮などが畫かれてある所を見ると、この俱舍曼荼羅なるものは矢張り正倉院文書に記載された六宗厨子中、第五厨子薩婆多宗厨子より其の形式の相承を受けたものであるまいかと思はれる。

然して天平時代に於て、かく隆盛を極めた聲聞像が、一度、次期平安朝時代に入る

や、蕩然として其の製作の根を斷つて、遺存品に於て、記錄に於て、殆ど皆無に近い位の狀況を呈して居るのは、頗る不思議な次第であるが、これは要するに天平小乘聲聞戒に對して、新に傳敎大師の大乘菩薩戒の戒壇が出來、又一方には法身佛崇拜の眞言、天台の兩密が一時代を風靡したからで、こゝに於て顯敎の六宗が漸く衰況を來すと共に、其れ等の要求に應じて作られた聲聞像は、全く影を沒するやうになつたのであらう。

然るに一條天皇の永延元年二月に、かねてから入宋して居た奫然法師が歸朝したのであるが、其の時、法師は有名なる梁の武帝が郗騫を遣して迎へしめた優塡王が拜寫の釋迦像の模像と（現に嵯峨淸源寺釋迦堂に安置せらるゝ三國傳來の釋迦像）それから十六羅漢像を請來した。これが抑も我が國に於ける十六羅漢像の濫觴である。この事に關しては扶桑略記に。

永延元年二月、入唐奫然歸朝、靈山第三傳釋迦等身像十六羅漢持來

又、元享釋書卷十六、釋奫然の條に

前略　然得大藏五千四十八卷及十六羅漢畫像

とある。而して現に京都嵯峨の淸凉寺に藏せらるゝものは全くそれであるが、遒勁な筆致を以て頗る丁寧に一幅に一人の羅漢像を描かれてある、それを見ると既に東大寺倶舍曼荼羅に現はれた比丘形の面目ではなく、現に我等が概念にある所の羅漢像であつて、奇怪な容貌、異趣な姿態、奇樹に據り、岩石を配して頗る人界を超脫した生活を現はし、ことに彩色は實に絢爛を極めたもので、羅睺羅の像などに至りては全く精功の極をつくした感があるが、其の製作年代に至つては、描筆が肥瘦の銳い點、又は草木の樣式等より推して、宋初の作と見るべきものであらう。

次に建曆元年、泉涌寺の俊芿和尙が宋より歸朝したが、この時和尙も亦十八羅漢を請來した、それは有名な禪月大師の筆と稱するものであつて、現に京都の高臺寺に藏せらるゝものであるが、それに關しては本朝高僧傳卷五十八に左の如く記載さ

れてある。

開化寺正大師謂レ苕曰、見二師姿貌一似二第十七慶友尊者一施二以十八羅漢畫像一携到二明州一翠巖侍者看曰此唐禪月大師之畫也、第二摹本在二育王山一尚珍藏焉、子獲二眞蹟一海東之幸也。

然して十八羅漢とか、十六羅漢とか言ふ其の羅漢の名は、古來不一定であるが、この慶友が十七位にあるとしてあるけれど、慶友は十六羅漢の本典とも言ふべき法住記の說者であれば、これを羅漢像中に加へるのは頗る不合理であると思ふ（この事に關しては大村西崖先生の著禪月十六羅漢に詳細に說かれてある）而してかく入宋の僧侶が十六羅漢像を將來したかと言ふに、當時支那に於いては、五代の初め禪月大師が十六、十八の羅漢像を畫き始めてから頗る流行したものと見えて、現に蘇東坡なども盛にそれに贊などをして居る、これ一に當代の支那は禪宗が頗る盛であつて、既に諸宗を風靡する概があつたから、勢ひ禪僧が愛好する所の羅漢の像が流行し、且つ其の結果、我國へも輸入されたものであらふ。然るに近江國滋賀郡阪本村來迎寺に古くから所藏せらるゝ十六羅漢の畫幅があるが、それを見ると畫風は甚だ土佐風を加味したもので、線の如きは頗る鳥羽僧正の筆致に似て居るけれども、局部局部に又唐畫風の面影を止むるものである、而して彩色の取り扱ひ方なども大に唐風を存するもので、斯道の學者の說では、畫は確に藤原時代の末期に屬すべきものであるとの事であるが、さうするとこの繪は俊苕請來の畫幅以前に於て我國で作られたもので、これに依つて推考すると、十六羅漢又は十八羅漢の藍本が齎然和尙の請來本以外に、當時既に輸入されて居たものと思はれる。又高山寺の緣起中に。

一羅漢堂

右堂者本是改移上人禪堂（上人は明惠上人ならん）爲羅漢堂嘉祿元年七月十四日賓頭盧尊者自二本堂一奉二移安一羅漢堂畢、繪像十六羅漢、同十五日安二置之一彼賓頭盧堂、狹少故、定二眞言喜海許一諸大檀那等爲二上人一十三年之追福一新造立供養今羅漢堂了

仁治二年六月一日棟　大工沙彌住佛

中略

同繪像十六羅漢各一躰

上人在生之時嘉祿三年四月十日成遲威儀仰爲二親報恩施入之

同像賓頭盧人尊者一軀　運慶作

此像者相具本堂本佛渡之

とある。されば當時早や羅漢堂の建立があつた事が明白であるから、隨つて羅漢像の製作は繪畫に於いて、彫刻に於いて、頗る行はれたものと窺はれる。

こゝに男爵高橋是清氏が所藏せらるる、禪月大師の十六羅漢圖十六幅あるが、これは原(もと)、正和年中、北條實時が金澤文庫に收めたものが、幾度か轉々して、男の手に入つたもので、故に由緒の正しいものである、ことに其の畫が、錢塘の聖因寺に在つて、乾隆の時寺主明水が摸刻した、石本と全く同一圖樣であつて、聖因寺本に、「西岳僧貫休作以二乾寧初冬孟廿參日一於二江陵一更續二前十本一、相去已十六年也云々」とあるのに對してこれには西岳僧貫休作の文字がある點から推して、禪月大師の眞筆として全く疑を容るゝべからざるものである。

然してこれを高臺寺所藏の俊芿和尚將來本と比べると、頗る相違することが甚だしきもいで、高臺寺本は筆法雄建なるに對して、これはやゝ枯淡(こたん)な筆致を以てせられ、彩色の如きも高臺寺本は頗る精巧に出來て居るが、これは稍粗雜(そざつ)で、ことに樹木巖石などの皴法は、高臺寺本には甚だ院體風の趣臭があるのに對し、これは甚だ文人的風格を有する點、亦其の形相が大に胡貌を有する所から見て、前者よりもこちらの方が、禪月大師の眞蹟を想はしむるものである。

次に東京美術學校に所藏せらるゝ李龍眠筆と稱する十六羅漢像の二幅があるが、これは實に見事なもので、恐らく我國に於ける李龍眠筆と稱する佛畫中其の最高にあるものであらふが、圖中に畫かれた羅漢像の如きは峻烈な面相、悠暢な態度、又

前三本の比ではなく、筆致の卓逸なる點、彩色の精巧を極むる所、正に觀者をして三歎せしむる概がある。案ずるに羅漢像も李龍眠の頃に至つて、益々工夫研究せられて、伯時に依つてそれが全く完成されたものであらふ。

續いて京都の大德寺に藏せらるゝ林庭珪及び周季常筆と言ふ五百羅漢の圖があるが、この二者は共に支那畫史上に其の名を認めることの出來ない人達である、案ずるに當時支那に於ける畫佛師ではあるまいか、而して其の幅に戊戌淳熙五年なる金字の題記がある所から推察して、南宋孝宗頃の人で又當時に於いて畫かれた事が分かる。そして其の畫を見るに筆力は中々雄健で、樹木巖石流水等生動の趣を呈し、又羅漢が其の中に逍遙して居る樣などが頗る巧みに畫かれてあるが、その容貌等は既に禪月大師風の胡貌が無くなつて、甚だ隱妥な顏になつたが、其のかはりに雲に乘つたり龍を玩んだり、種々の樣を寫して居る所は大に趣向を凝してある。然し其の畫品と言ふ點に至つては、李龍眠の畫に比して遙かに及ばないものである。

猶ほ當時の舶載畫中、陸信忠筆と稱する羅漢像があるが、この人も矢張り支那繪畫史の上では餘り其の名を見受け無い人で、恐らく前二者同樣に繪佛師であつたのであらふと思はれる。而して其の畫は甚だ前二者のものに似て、却つて前二者よりも構圖などに面白味があるやうに思はれる。

後、足利時代に至りて（嘉禎二年に建立せられて）應永四年に修覆せられた東福寺の山門の樓上に五百羅漢の木像を安ぜられてあるが、當時は我國に於いて最も禪宗の流行した時代であるから、勢ひ其の寺院などに五百羅漢像等が安置されたものと見える。

次は東福寺の殿司明兆（でんすみんてう）が、禪月や李龍眠の風を慕つて盛に五百羅漢を描いたが、其の筆致と言ひ着色と言ひ頗る李伯時（りはくじ）に類するもので、殆ど彼れの壘を摩するの概がある。これが我國に於ける五百羅漢を描いた人の中で最も有名な人である。

それより以來桃山以後に至つて大に羅漢像が流行して、隨分其の製作も盛んであ

つたが、それにしては餘り見事な製作は出來なかつたものと見える。

其の後、承應三年に隱元禪師が東渡した時、隨つて來た范道生（はんだうせい）と言ふ佛師が、盛んに明風（みんぷう）の羅漢像を作つたが、これに依つて一時非常に黃檗風の彫刻が流行し從て范道生風の羅漢像が行はれた、これが我國に於ける羅漢造像の掉尾の光彩であつた。

猶ほ終りに羅漢像に關しては大村西崖先生著の「禪月大師十六羅漢」に詳細なる記載ある　吾人はそれに依りて羅漢に就いて非常なる知識を得た。（終）

羅漢尊者の因緣奧附

定價金七拾錢

大正八年三月十五日印刷
大正八年三月十八日發行

正法
興隆

著作者　新井石禪
　　高橋竹迷

發行者　新潟縣佐渡郡羽茂村貳千七拾五番地ノ壹
　　島谷正風

印刷者　東京市麻布區本村町十八番地
　　中野鉄太郎

印刷所　東京市芝區愛宕町三丁目二番地
　　東洋印刷株式會社

發行所　新潟縣佐渡郡羽茂村
　　大蓮寺

布教の指南

新井石禪老師著

曹洞宗綱要

△定價金六十錢
△送料金六錢

修證義說教軌範

△金壹圓五拾錢
△送料金八錢

觀念の力

近刊

發行所　東京市芝區月露町八十　鴻盟社　振替東京二九二〇二　電話芝九七九七

家庭の伴侶

高橋竹迷師著

金剛力

△定價金壹圓
△送料八錢

婦女の信仰

△定價金壹圓
△送料金八錢

常濟大師の教訓

△定價金三拾錢
△送料八錢

發行所　東京市芝區月露町八十　鴻盟社　振替東京二九二〇二　電話芝九七九七

トエ2B-15

信仰の標準

高橋竹迷師著

實驗の因緣
△定價金八拾錢
△送料六錢

求道の因緣
△定價壹圓廿錢
△送料金八錢

山水と人物
▽定價金五拾錢
△送料金六錢

發行所 東京市芝區露月町八十 鴻盟社
振替東京二九七九
電話芝二〇二七

325
532

2B
15
ウラ

2B
15
ウラ

終